
お人よしのオオカミさん

ふちか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お人よしのオオカミさん

【NZコード】

N9675V

【作者名】

ふちか

【あらすじ】

ある日、突然家族を失い田舎で老夫婦に育てられた主人公、春原司狼（すのはら しろう）。

そんな優しい老夫婦も、亡くなりそろそろ自立しようかと思つていた矢先

「キサマの力が、必要だ」
とどこからか声が・・・。

じいさんの最後の言葉、

「困っている人がいたら助ける」

とこう遺言を胸にその呼びかけに応え、司狼は異次元の世界へと旅立つ。

～プロlogue～（前書き）

初めて連載小説を書きます。

なにぶん初めてですので、誤字・脱字が目立ち
文章もつたない感じになってしまっています
自分の文章力も上げる目的で書いていますので、なにかアドバイス
などがあれば遠慮なく申し立ててください

主人公が最強設定です

荒しなどは控えてください

「プロローグ」

俺の名前は、春原司狼。

すこし、わけありの18歳だ。

俺がまだ10歳の頃だった。

その日は、いつもと変わらない日常から始まった。

朝に弱い俺を一つ下の妹がわざわざ起こしに来ててくれて、お母さんが作ってくれる朝ごはんを食べて、その後、寝巻きから私服に袖を通して、ランドセルを背負つて妹と一緒に学校へ行く。そして、学校で友達としゃべって授業を受ける。

そんな当たり前の毎日。

妹は低学年だから、四時間目が終わるとすぐに下校になる。それを「早く帰れていいいなあ」と思いながら見送っていた。日常生活が壊れ始めたのは、そう、昼が少しあつた辺りからだった……。

突然ドアがバンッと開けられて、血相を変えた先生が飛び込んで来た。

「司狼君っ！ 急いで帰る準備をしてっ……早く？！」

先生がなぜあわてているのかわからない。

友達も

「お前なんかやったのか？」

と、茶化してくる始末。

わからないながらも、急いで鞄を片付けて帰る支度をした。

先生にそう告げると……。

「今からあなたの家に送るわ」

と、理由も告げられずになすがままに帰路に着いた。家が近づくにつれて辺りが騒がしくなってくる。

救急車やパトカーも何台も走っていて、五月蠅かつた。

だけど、家についてみてその理由もわかつた。

『春原一家惨殺事件』

当時には、新聞1面にでかでかと載つたりしてかなり有名だつた。ストレスが溜まりに溜まって、自暴自棄になつた犯人が、誰かと心中しようとした先が俺の家だつたと言つことらしい。

といつても、その犯人は最後の力を振り絞つた父さんに、ぶん殴られて転倒。

そのまま、騒ぎを聞きつけた近所の人人が通報して、氣を失つている犯人はお繩になつたらしい。

あの頃の記憶は、大分おぼろげだ。

担架に運ばれていく家族に泣き叫んで近づいていくのを、先生に抱かれて「見ないで上げて！」と抑えられたりして、結局、家族の顔は朝に見たのが最後だつた。

幼かつた俺はその現実を受け入れたくなかったのだろう。

糸が切れたように先生にもたれかかり、何週間か入院していた。

そして、俺が寝ている間にいろいろなことが決まったそうだ。

家族の、葬式はもうやってしまい、俺は家族を見送ることもできなかつた。

次に俺の引き取り先。

親戚の中でなかなか手を、引き取るという手は挙がらず、その中で母さんの母親、父親の老夫婦が残りの余生に育てたい。

と、俺を引き取ってくれたそうだ。

そして、俺はじいさん、ばあさんに引き取られ、今よりも実家の田舎に移り住んだ。

じいさん、ばあさんにはすぐ感謝してる。

落ち込んでいる俺に、優しく俺に接してくれて、今じゃ俺も元気に生活してる。

だけど、俺を引き取つてから6年後にばあさんは亡くなり、その1年後、後を追うようにじいさんも息を引きとった。

二人ともやらかな寝顔だつた。

そして、じいさんが最後に残してくれた言葉・・・。

「困っている人がいたら、必ず助ける」

という言葉を胸に今を生きている。

そんな俺も、18歳になり、森の動物や権割とかしたりして筋肉もそれなりについたし、身長も180cmを超えた。

森の動物の気配を読めたり、狩の腕もかなり上がりついていて、じいちやんがいれば、「一人前になったのう」と褒めてくれるだろう。そんなんだから、森で猟師として働くかなど思っていた矢先、どこからか声が聞こえてきた。

『キサマの力を・・・貸してくれ』

得体に知れない声だつた。

だけど、助けを求めているなら、応えよう。

それが、どんな存在であつても・・・。

「俺が必ず助けてみせる。だから、俺を使ってくれ」

瞬間、俺の体を光が包み込んだ。

～プロローグ～（後書き）

司狼が異世界へ旅立つところまでプロローグでした！

次回から異世界編です

まあ、物語は大きくは進みませんね

すみません

なにぶん初めてで、文章にノリがあるませんが、自分の精一杯でやつしていくのでよろしくおねがいします

我が身を犠牲に・・・（前書き）

初めての作品なので、せぐりせぐりやつてこいつと思っています
つまりなんどいの意見も自分を成長させる意見としてとりいれます
で、どこが悪いのかなど細かい指摘もしてくださるとうれしいです
誤字・脱字などあれば訂正しますので、よろしくおねがいします

我が身を犠牲に・・・

「ん？」「は？」

光に包まれて、田を開けてみると、ビルほどあるんじゃないかとい
う大木に囲まれているのがわかつた。

こんなでかい木、俺の家の森にもねえぞ・・・。

その大きさに若干気圧された。

だが、反対に木々を搔い潜つてきた風は心地よく頬をなでる。
まるで、落ち着け。

とでも、言つようにな。

「うん、いい所だ」

思わずつぶやいた。

あまりの心地よさに、光に包まれたとか、ここが何処だとビックりで
も良くなつた。

まるで、自分と1対となつてくれているようだ。

「小僧・・・。ずいぶんと落ち着いているようだな・・・」

唐突に聞こえた声。

光に包まれる前に聞こえた、弱弱しくも、強く、威厳のある声。

「後ろだ、小僧・・・」

自分に影が出来たのがわかる。

氣配を感じなかつたぞ・・・。

少々怖いが、声の通りに後ろを振り向く。

「後・・・ろ？！」

そういわれて、振り向いた先には・・・。

「呼びかけに、応えてくれたことをまずは・・・、感謝・・・する

ぞ、小僧・・・」

白銀の毛皮に血を滲ませた、強く氣高い狼がそこにいた。
ははっ・・・。

さすがにちょっと、ちびつたわ。

イタズラ成功みたいに、口角を吊り上げて、一ヤツとした狼に少し腹が立つた。

「それで？あんたが俺をココに連れてきたのか？」

「うむ、その通りだ。我がキサマをこの世界へと誘つた。我が名は、こくせなフェンリル。フェンと呼ぶがいい」

「おーけい。んで、俺が春原 司狼だ。小僧じゃなくて、司狼と呼んでくれ。よろしく」

最初は驚いたが、落ち着いてみればどうしたことになかった。俺を喰う気はないらしく、かなりの知性があるらしい。

目の前の狼・・・。

フェンは体長は6mくらいだろうか。かなりでかい。もののけ姫の山犬よりも少しでかいと言つたほうが、伝わりやすいだろうか・・・。

つやつやとした毛は、狼特有、『わごわ』していると思いまや、触れてみるとかなりやわらかい。

自分に意見を許さないという様にこちらを睨むする『い』劍幕。

王者にふさわしいほどに堂々とした威厳・・・。

・・・正直に言つわ。

かなり怖い。

正面に立つのぞえ躊躇するほどに・・・。

まあ、いま真正面にいるんですけど。

だけど、気になる点が一つ。

・・・ところどころ、あふれ出している血だ。

一番酷いのは、腹の部分。

周りの毛が焼け焦げており、穴が開いているような傷だ。

フェンも相当やせ我慢をしているのだろう。

普通にしゃべっているように思つが、眉間にほしわが寄り、表情も険しい。

息も荒い・・・。

その視線に気づいたのか。

「我の傷のことは気にするな。もうどうにもならん。死期が近いのもわかつてゐる。だが、心残りがいくつがあるのだ。だから、異世界の住人であるキサマを呼んだ」

「ニシナガ」

ことだな?」

「まあ、そうなるが・・・なんだ、傷を治せとかか？」

「いや、わざわざからぬつてこねえハシ、もつゞいハシならん。正直に言ひ、わざわざから意識も、朦朧としておる。キサマに頼むのは

そこで、この問題の解き方を示す。

「キサマには我的力を受け取つて欲しい」

いしゆ

即答だと、「ハ、ハ、ハ！」

俺の即答が予想外だったのだろう。

弱々してるのは 激しそうをして血を吐いていた

「ゴホッ、ゴホッ・・・キサマ・・・。得体の知らない力だぞ?少
しは迷つてうせつづけ

「全然。う前バカサラヒ」

「全然 お前が助けてくれていこうなら なんであれ 僕は無条件でお前を助けるよ? それが、俺の想像を超えるものであつても・・・」

正直な話。

怖いっていえばうそになる。

だけど、フヨンが死ぬ気でものを頼もうとしているんだ。それを断るなんざ、死んだ時にじいちゃんに殴られちまつ。

爆笑してやるうかと思つたが、殺されそつなのでやめとく。
だが、すぐにもとの顔に戻つて、

「そりゃー、お前を選んだのは正解だつたようだな。肩みたいにやつだつたらこの場でハツ裂きにしていたところだが……怖いこといいやがる……」

空気が突然、ピリッとしたものになった。

鳥肌が止まらない。

さつきまで、心地よかつた風がやみ、さわさわと音を立てていた木々の音もやんだ。

完全な静寂の世界。

もちろん、そんな世界を作り出しているのが、目の前のフェン。せつきまでの雰囲気を完全に消し去り、へたつっていた毛も逆立つている。

「小僧……我も限界が近い。手短に話すぞ。キサマに受け継がれるのは、我の力……力といつても純粹な筋力だが……それと、センス……この一つが人を凌駕する。本当は魔力も渡してやりたいが、あいにく、我の魔力が高すぎる故、人のみであるキサマの器がもたん。それと、キサマの体にも変化が起じる。我を引き継ぐことによって、人よりも我ら『天狼族』……我らに近い存在になる。といったところだ。何か、質問はあるか?」

「俺、この世界についてなんにもしらねえんだけど……

おい、そこの狼。

しまつたみたいな顔すんな。

「すまんが、そういうことは、娘に聞いてくれ。これが終わるまで、周りで見張りをさせている。終わればいろいろなことを教えてくれるだろう。心残りとは、娘のこともある……頼んだぞ」

「了解、俺からはもうねえよ」

「そりゃー、では……いくぞつ……」

フェンが、空に向かって遠吠えをする。

すると、空から魔方陣のようなサークルが現れ、俺とフェンを囲つた。

空気が張り詰める。

「我、天狼王の名においてー」

—なんだろう、圧倒的な存在感を放っていたフーンの空気が薄くなっている。

『若き勇者の力にならん』

フエンが、呪詛を唱えていくにつれて、俺の頭の奥がピリッと痺れる感覚がよぎる。

『我的命を糧として』

「グツ・・・！ああつ？！」

あまりの痛さに、頭を抱える。

その様子を、フヨンは血が滲むほどに歯を食いしばり眺める。

—すまんな、小僧。これで、最後だ……。

『私は勇者の血となり、肉となるつ！』

「ああああああああ」――

フェンが、呪詛を言い終わった途端、頭が焼ききれるんじゃないか

という痛みが襲う。

意識を手放す前、フェンのそんな声を聞いた気がした。

ペロツ、
ペロツ

ぞひざらした生暖かいものが顔をなめている感触がある。

— ३ —

目を開けてみると、フェンが俺の顔をなめていた。

比べ物にならないほどに小さこ。

一三六〇・・・せじだらうか。

俺よりも、小さい狼がそこにいた。

田の前の狼の頭に手を載せて、うつやうつやと撫でてやると、うれしそうに顔を擦り寄せてきた。

「かわいいなあ・・・」

おもわずつぶやいてしまった。

だが、褒め言葉だとわかったのか。

「くう～ん」

とさりに甘えるように擦り寄ってきた。

ずっと、じつしているのも良かつたが、フーンのことが気になる。痛む頭を叩き起にして、キョロキョロとフーンの姿を探す。いた・・・。

見つけた・・・。

「フーン・・・」

ようよう立ち上がる俺を心配してか、狼が支えになつて歩かせてくれる。

どうにか、フーンの近くまで歩いていく。

そして、フーンを見上げて立ち止まる。

「あんた・・・かつよすぎるだろ・・・つーー！」

知らず知らずに声は熱を帯び、田頭に熱いものがこみ上げてくる。

俺の視線の先には、死して尚も王者の貫禄を見せつけ、決して倒れるのよしとしない王の姿がそこにはいた。

一本氣で尊敬するよ、フーン

俺はこの世界で始めて泣いた・・・。

我が身を犠牲・・・（後書き）

すみません

ながながと書いてしまいましたw
フヨンと司狼の出合いでした。

どうでしたか？

まだ、冒険にでていませんが、感想などがあつたら遠慮なくして
つてください

誤字・脱字はすぐに修正します

では、これからもよろしくおねがいします

褒められたのはZG（前書き）

まだまだ、森から抜け出しません
進行が遅くてすみません

やりたいことが多くて、大変です

まあ、作者の力不足なので罵つてやつて下さい

後、主人公のキャラが崩壊していきます

最初からそんなキャラにしようとしたら、シリアル方向に行つてしまい真面目キャラに・・・

ご了承下さい^ ^

褒められるのはNG

ああ、泣いた泣いた・・・。

こんだけ泣いたのも久しぶりではなかろうか。

俺が泣いている間も、狼は離れていかず、ずっと近くにいてくれた。

ありがとな、という思いも込めて頭を撫でてやつた。

「ごろごろと甘えた声を出して、喜んでくれている。

「さて、それにしてもフヘンをどうするか・・・」

なにしろ6mの狼だ。

それに、個人としては埋めてやりたい。

「しようがない・・・。墓を掘るか」

そういうて、フヘンの体に触れようとしたとき、

ガブリッ。

は？

狼が腕に噛み付いてきた。

「ちよつ、ま？！」

「グルルルルルッ！」

低く声を唸らせている。

まさか・・・。

「このままにしておけと？」

腕に噛み付いたまま「クン」と頷いた。

「いやつ・・・でも・・・・・・いいのか？」

「わふっ」

当たり前だというよくなかった。

・・・まず、その噛んでいる腕を放して欲しいがな、わんこう。
俺がフヘンに触らないことがわかつたのか、腕を放してくれた。

とつあえずフヘンの亡骸から離れ、近くにあつた切り株に腰をかけた。

まずは、Jの狼さんと会話してみよう。

「え~と、まず君がフヘンの娘さん・・・でいいのかな?」
Jくんと頷く。

「俺、君からこの世界の事とか聞けといわれたんだけど、君しゃべれる?」

眉間にしわを寄せて、しまつたと言う顔を器用にする。
フェンもそうだったけど、動物も表情を作るんだな。

そんなことより。

「もしかして、しゃべれない?」

ふるふると顔を横に振る。

「それじゃ、どうやって?」

狼は、迷ったようなそぶりを見せ、数歩下がった。

そして、狼の体に変化が現れる。

まず・・・立つた。

二足で・・・。

その後は体に変化が現れる。

今まで、狼を覆っていた毛は、なりを潜め血色のいっピンクの肌が見え始めた。

指は、3本から5本へ。

そして、体は、ふるんっと形のいい胸が突き出し、出るところは出て、引っ込むところは引っ込んでいる世界中の人があつらやまじがるのではないかというほどに理想的なスタイルに。

そして、狼だった顔は、口がだんだんとへこんで行き少々目つきはきついが、美人に入るだろう整った顔になつた。

そして、スタイルも顔でさえもどうでもいいと思つてしまつほどの、白銀の髪。

風に吹かれて、なびくたびにあちこちが光つてさえ見える。

俺は完全に彼女の一挙一動に魅了されていた。

だれかが、見ていればアホ面で笑われるだろう。

「くすっ、変な顔をしておられますよ？これで大丈夫です。話せます」

あなたがいましたね。

しかし、ニコッとした顔もきれい、いや可愛い、いやかっこいい？なんでもいいや、とにかく何でも当てはまる。

そんな、彼女に俺の目は完全に釘付けだった。

「あの・・・そんなに見られるとさすがに恥ずかしいのですが・・・

」

といつて、身をよじる。

そう、彼女は変身？した後だから裸。しみ一つない肌。

だからだろうか？

「きれいだ・・・

俺は無意識のうちにつぶやいていた。

すると、ピシッ、彼女の表情が固まった。

クルツ 彼女が後ろを向く

ダツ 脱兎のごとく駆け出した

「―――っ！」

「え？！ちょ・・・まつ！！逃げるの？！見られてたのは大丈夫で、褒めるのはダメ？！その前に、服つ服着て―――っ！」

見れば走り去る彼女の顔が赤い。りんごのようだ。

褒められるの苦手なのか。

じゃなくて！！

追いかけないと、見失うっ！！

俺も彼女を追つて、森に入つていつた。

か。 フェンの亡骸が苦笑いしていたように見えたのは、 気のせいだろう

寝めりやねるのはZG（後書き）

テスト期間中で、更新が遅れました
すみません

この森の中で結構、重要なことをやつてこぐでなかなか冒険にで
れません

ついでに書つと、まだこの世界のことをあまりたく話してしませんよ
ね・・・

文章がへたでもうしわけないです

ここまで読んでくれた方感謝感激です

これから更新は、毎週土曜日にしてこいつと戻ります

今週はもうしましたが・・・。

まあ、できればやつていきたいです

また、面白かつたなどなんでもここで感想をいただけるとトシシ

ヨンも上がつて、喜びます

誤字脱字などがあれば遠慮なく言つてください
それではつー

拾ったものは食べない（前書き）

相変わらず話しが進みません
コメントや、お気に入りにしてくれた方かなりうれしかったです
よろしくお願ひします^ ^

拾つたものは食べない

彼女が走り去つて、後を追つたがさすがは狼といつたところか……。

「ちくしょ……。見失つちまつた……」

早かつた。

振り返りもせずに、向こうも全力で走っていたから、俺も全力で追いかけたが、瞬く間に差は開いていつてついに見失つた。しかし、少し違和感があった。

「息が切れない?」

あれだけ、全速力で走ったのにも関わらず俺は、息一つかいでいい。

まだウォーミングアップもできていない。
すこしあつたまつてきたぐらいの感じ。
これも、フェンから授かった力の一端。
だが……。

「ここ、どこだ?」

そう、正直に言おう。
迷つた。

猟師をやつていて森に慣れているが、いかんせん。
ここは知らない森。

どうやつたら、フェンのところまで帰れるのかさえもわからない。
なにか食べようとしてもそこに生えている青のかさに、白い斑点があるキノコなんて怖くて食べられない。

ぐう~。

……腹が減つてるんだからしじうがないじゃないか。
このままじゃ、餓死で死んでしまう。

しうがない。

背に腹は変えられない。

安全そうなキノコを食べようじゃないか。

そのキノコは、茶色でさつきから見える青いキノコのようだ。斑点もない。

においをかいで見ると、甘い香りが鼻を刺激した。

うん、これなら食べられそうだ。

俺は、キノコを口に運び、食べた。

においからの想像通り、甘い。

噛めば噛むほど、甘みが増していき頬がつり上がりで行く。

「ははっ！ハハハッ！ハハハハハハハッ！！」

おかしい！！

笑いが止まらない。

んな、漫画みたいな展開。

笑い草とかあるのかよ！？

こうして、思案している間にも笑いが止まらない。

しかも、全力で笑っているから腹筋も痛い。

その時、後ろの茂みから、ガサツと音がしてフホンの娘さんが飛び出してきた。

「探しましたよー！？」
「」
「笑い草を行つてた……笑い草を食べたんですね……

逃げたのは君だろ。

だが、今はツツコム余裕さえない。

「そうそうー！笑いが……ハハっ！止まらない！！！」

「わかりました。少し待つていてください。直ぐに薬草と食べ物を持ります」

それからも俺は笑い続け、娘さんが戻ってきた頃には乾いた笑いで、「ははっ……」と迎えてくれてかなり焦ったそうだ。

途中から笑いすぎて意識が飛んでた。

今回の教訓——よくわからないものは食べない。
ホントに気をつけてね。

拾つたものは食べない（後書き）

こんばんわっすみません、夜中の更新になってしましましたまあ、なかなか物語が進みませんね……なので、2話同時投稿しますそれでは、次の話しへGO！例のじとく、誤字脱字があればよろしくお願いします^_^

譲れないもの（前書き）

「」でいろいろ説明します
まあ、いろんなことが分かります
だから、どうか飽きずに読んであげてください。w

譲れないもの

あれから、フーンの娘さん——アルセー——は持つてきた薬草を煎じてくれてのませてくれた。

そして、現在この世界についていろいろなことを話してもらっている。

話し方は、アルセは敬語だけど俺はいつも通りに話している。

「……。ここまで、よろしいでしょうか？」

「うん、大体わかった」

とりあえず、最初にいた場所……フーンのところまで戻つて一人して、座つて話している。

ちょこんと俺の前に座る、アルセはかなり可愛かった。
なんていうの？

小動物？

そんな感じ。

あと、服は着てもらった。

まあ、俺の上着を羽織つてるだけだけど、さつきよりかはましまともに見れなかつたもん。

まあ、それはおいおい置いといで。

アルセはいろいろ話してくれた。

まずこの世界の名前。

『クラシーブ』

というらしい。

話を聞く限り、俺のいた世界とは圧倒的に違つていて。

さつきのキノコ然り、種族も人間もいるにはいるが、エルフや魔族、

竜人族に獣人族、そして……フェン達”天狼族”。

天狼族は、種族の中でもかなり、ランクが高いらしく。

あるところでは畏れられ、あるところでは崇められている種族らし

い。

そして、この場所。

『白銀の森』

といい、代々、天狼族が守護しており、縁が豊か。
また他の種族に荒らされたこともない神聖な森らしい。
それを語っているアルセの顔はどこか誇らしげだった。

「豊かだから、危険な魔物もたくさんいますよ？」

といわれたときに、「俺、遭遇したことないけど？」と聞いたら、「今は私が周りを警戒してますから、それに父の骸もありますし。それと、逃げる……時には、魔物がいない道を選んでいましたから」そう語る彼女の顔は少し赤かった。

そうか、この親子に守られているのかと安心させられたこともあった。

そして、まだ話は続いている。

「そして、本題の、”なぜあなたに力を授けるにいたつた理由”……。それは、父がこの世界のことが好きだったからです」

黙つて聞く。

「父は言つていました。『私はこの世界が気に入っている。だから、我は守りたいのだこの世界を……』と。もう、自分の力が世界を救うこと出来ないのがいやだつたのでしょう……。自分の志を受け継いでくれる方を最後に探していたのです」

「それが……俺？」

「はい、司狼さん。父は最期に魔力を振り絞り、異次元からあなたを手繩り寄せたのです」

フェンが俺のことを呼び寄せた理由。

「世界を守りたいから」

どうして、あの人はそこまでかつこいいのだろうか。
俺は、フェンの志を深く心に刻んだ。

だけど、理由はそれだけではないだろう。

おそらく俺の目の前にいる人。

アルセ……。

フェンの娘。

娘を一人置いて、逝きたくなかったのだらう。

それほど、心配だったのだ。

だから、俺を呼んだ。

おそらく、理由はもつとある。

だけど、それは知らなくていい。

この二つだけで十分だ。

「そして、父を殺した種族は……龍族……」

彼女は抑揚のない声でつぶやいた。

今までの彼女からは想像できない冷たい声・

「龍……族？」

「はい、この世界には先ほど申した通りいろいろな種族がいます。そのなかでも、一際、凶暴、荒くれ者が多いことで有名な龍族。龍族には、自己中心的な考えを持つものが多く、”気に入らない”、“うるさい”といったくだらない理由で一国と戦争を起こすことも、多々あります。

しかし、まだ、力が弱いというなら話は変わってきたのですが……」

「そういうて、言葉を濁した。

「もしかして、強いの？」

「その通りです。龍族はかなりの魔力や力を持つており、種族ごとにランクがあるのですが、龍族はSランクに属しています。そして、私達、天狼族はAランク。Aも十分に強い部類に入るのですが、Sランクまで行くと、伝説級。強さが桁違いなのです」

世界のこととかを教えてくれていたときとはちがい、弱弱しく言葉をつむぐアルセ。

龍族の話になると、とたんにうつむいてぽつぽつと話している。

「フェンを殺したのも、龍族だってこと?」

「はい……そうです」

「そんな……」

驚愕した。

あの強そうなフェンでさえも殺した、龍族。

「どんなやつなんだよ……」

「父の一番酷い傷。おなかにある傷は、龍族の炎のせいです。龍族は炎を自由に操る」ことができ、父を貫いた炎は”炎槍”といつらじいです」

今度は憎憎しげに吐き捨てるような言葉。

憎いのだろう。

父を殺したやつを。

俺だつてそうだ。

家族を殺した犯人をどれだけ殺そうと思つたか。

夢まで見て、何度も犯人を殺したか。

－何度も何度も、犯人に刃物を突き刺し、家族の苦しみを味合わせてやろうと思つたか。

家族を失つた悲しみは計り知れない。

「それでも、なんとか父は撃退することが出来ました。自分が傷ついても、この森や私を助けようとして……。まだ、縄張り争いだつたら、私もすくなくすく納得できました。しかし、あいつが言う理由は”ゴミ掃除”……だそうです……。目障りだつたのでしょうか、父が……」

今、何て言った？

その言葉を聴いた途端、血液が沸騰しそうになつた。自然と歯を食いしばり、拳は血が滲むほどに……。強く、強く握り締める。

「『ゴミ』……だと……！？」

—俺に人生を託した狼を。

—誇り高き狼を。

—優しかった狼を。

「ふざ……けるなよ……っ！」

あの人を、コミだと？

俺の人間としての理性に歯止めが利かない。
見たこともないやつに憎しみが募る。

コインでタワーをつむがごとく、どんどんと高くなっていく。
だけど……。

握り締めていた手を暖かい手が包み込んだ。

「アルゼ？」

彼女は俺が握り締めている拳を優しく、優しく解き始めた。
目の前に彼女の顔がある。
先ほどまでとは、違った優しい顔。

「ありがとうござります。司狼さん。父のためにこんなにも怒って
くださつて……」
ちがう。

「父があなたを呼んだのは正解だつたようですね
ちがう……。

「私も嬉しいです」

ちがう……！

「私も悲しいですが——」

「ちがうつ——！」

俺は、彼女の方をガシッと掴んだ。
自然を掴む手にも、力が入る。

「いたつ！痛いです、司狼さん——離し——」

「嘘を……つくくなつ——！」

痛がつてもがいていた彼女の体がビクツとはねた。

「嘘をつかないでよ、アルセ！悲しいんだろー？フェンが居なくなつて……。なんで、そんな嘘つくんだ！！なんで、わらつてるんだよー！」

「何を……」

「アルセ、我慢してる。泣くことを我慢してるだろー！本当は泣きたいのに我慢してる。悲しいなら泣けばいいじゃないかー！」

彼女はうつむいた。

「私はお父さん……からあなたのことを任せられます。あなたを不安にさせることは出来ません」

フェンに俺のことを任せられるのか？

だつたら……

「だつたら、俺だつて君のことを任せられる！フェンから”娘を頼む”つて。だから、君が悲しいなら俺は助けなきや、いや助けたい！フェンのお願いがなくたつて、君を助けたいんだよー！」

じいさんが最後に残した言葉。

”困つてる人がいたら必ず助けろ”

フェンが残してくれた。

”娘を頼む”

二人の言葉が俺を強く動かす。

目の前の、彼女はまだ吹つ切れてない。

悲しみを、心の奥深くに閉じ込めている。

そんなんじゃ、前に進めない。

過去の人にこだわっていたんじゃ、いつまでたつてもその場所にいる。

俺だつてそうだ。

いつまでも、家族にこだわっていた。

そのせいで、いろんな人に迷惑をかけた。

友達にもじいさん、ばあさんにも……。

だから……。

俺は肩を掴んでいた手を離し、代わりに腰に手を回し彼女を抱き寄

せた。

抱き寄せた拍子に、彼女の髪が鼻を掠める。

「甘くて優しい香り。」

そして、華奢で小さい体。

「叫んでごめん。だけど、悲しいなら泣いていいんだよ。俺はそれを迷惑だなんて思わないから……」

優しく、自分の思いが彼女に伝わるようにならせる。

「俺はフーンのことが大好きだよ。もちろん、アルセも。だから、笑って欲しい。無理に作る笑顔じゃなくて、本当の笑顔を……」

……俺、今すぐこの恥ずかしい言葉をいつてるんじゃ。

まあ、本当のことだからいいか。

アルセの手が俺の背をギュッと掴んだ。振るえている。

「……私……泣いて、いいんでしょうか?」

「……うん」

「なり……すみま……せん」

彼女は俺の胸に、顔をうずめて小むく泣き始めた。

その小さな体で我慢していたのだろうか。

俺は、アルセの髪をできるだけ優しくなる。

「うう……ぐす……うあ……ああ……」

先ほどとは違つて、穏やかな時間が流れている。

「すみません……お見苦しいところをお見せしました

あれから結構な時間泣いていた。

アルセの頬は真っ赤になっていた。

「アルセ……」

落ち着いたのを、見計らつて声をかけた。

「なん……ですか?」

「さつき、フーンのこと、お父さん”って呼んだよね

「えー?」

そうアルセは凤凰网のことを”父”と呼んでいたはずだ。

このことが指す意味は……。

「俺に敬語なんて使う必要なくないか？」

「しかし……」

「俺とアルセの間でそういうのはなし、お互い自然体で行こうぜ。きょとんとした顔でこっちを見ている。すると、今までの中で一番いい笑顔で……

「分かった！」

やつぱり、この子可愛いわ。

これで、いいんだよな。

じいさん、凤凰网。

どこからか

『よくやつた』

なんて声も聞こえたり、聞こえなかつたり……

譲れないもの（後書き）

ながながと申し訳ありません

やつとこの世界についての話を出来ましたw
と、いかによつと急展開でしたかねえ？

無理やりもつていつた感が……

そして、アルセは本当は活発な子です

どっちかというと天真爛漫？

次からは打ち解けた一人が、旅にでる準備をします
やつとつぎで終わりですか？

どこか矛盾点や誤字脱字などありましたら、修正しますので言って
下さい。

また、感想なども待つてます

次の更新は、火曜日くらいになります

それでは！！

あと、アルセの狼状態の時2mと書きましたが修正して1m60ほ
どということに直しました。

司狼が180くらいで、アルセが人間体になつても司狼の方が大き
いです。

よろしくおねがいします^ ^

決意（前書き）

結構、長くなってしまった

森編終了までこれをあわせて後、一話一

駄文ですが、見ていくください

いろいろ小説読んで、表現の仕方を学びたいとつづく思った話ですね

決意

フェンから力を貰つて一週間が流れようとしていた。

あの後、直ぐに旅に出るのかと思いきやそうではないらしい。

ある程度は”天狼族の力”に慣れて欲しいといつことで、この白銀の森で生活する羽目になった。

この森で、生活していく改めてこの森が豊かなのだと思い知られた。

日光を反射してきらきらと光る湖に、その中をゆらゆらと優雅に泳ぐ魚達。

森全体は明るい新緑の色で彩られ、風が木の葉を揺らすと木漏れ日が心地よい光をくれた。

そして、草食の魔物は草を食べ、肉食の魔物は草食の魔物を食べる。

それの食べ残しを鳥系の魔物が食べ漁り糞を出すと、草へと帰る。完璧な食物連鎖だった。

まだ他の種族に、荒らされたことがないのが、ありありと分かるこんな所で生活できたことを、俺は一生の誇りに思つだろ。

そして、アルセはここで生活する間にある条件を出した。

それは”グルズを倒すこと”だ。

”グルズ”とは何か？

そう思うだろうか。

そうだなあ、元の世界で言う熊を思い浮かべてくれたほうが、想像しやすいだろうか。

といつても、熊とは比較にできない。

全身が黒の毛皮で覆われており、四肢も丸太のように太い。

そしてやっかいなのは、その巨体と爪。

”グルズ”は体長が3mもあり、俺の身長を軽く越す。

やつが立つと、一人分くらいの日陰が出来るほどだ。
そして爪。

”グルズ”の爪は、この世界で強く生きていくために、鋭くとがつておおり、触れたものをいとも簡単に切断する。

”グルズ”が俺の目の前で、獲物を真つ一つにした様を。 戰慄したよ。

そして、アルセはその”グルズを3体を倒すこと”をノルマとした。少しでも、天狼族の力に慣れて欲しいらしい。

そして田畠は初めてとてたことを教えてもらひにいなことを教えても

まずは筋力。

ためしに、俺の倍はあるかという巨大な岩を持ってみてと言われたので持つてみると、簡単に持ち上がった。
まあ、その後に片手でも十分に持てた自分に、戦慄したが……。
そして、聴力・脚力などいろいろなものを試してみた。
全てが人間を超えていた。

遠く離れた音を聞き分ける耳。

夜中でも脇間のように明るく見える田。

アルセと並んで、走られるような足。

そして、”グルズ”狩りが始まつた。

一四三

「いい? 司狼、まずは……あたつて碎けろ! だよ?」

「モヒカ、モニ」

俺達の間には、敬語はなくなつていった。

備達の間には、荀説はなくなりて、いたるところに明るい子で知らずの内に

いろいろ確認した後に、

「付いてきて」

と言われて、すたこらせりを歩くアルセに付いて行くと、田の前に

は話題のグルズが居た。

今は、こつちが草むらに隠れているおかげで、まだ気づかれてはない。

そしてこの台詞である。

「無理無理無理っ！…なにあのでかい毛むくじゃらっ！俺よりでかいでしょ！？」

「も～、わがまま言つ子には……えいつ！」

小さい掛け声と一緒に、俺を小さな手が押した。

「てめつ」

がさつと一人、草陰から飛び出す。

「あははっ……」

すでにグルズはこちらに狙いを定めていた。

「グルオオオオオオオオアア！…」

ビリビリと肌が打ち付けられるような、咆哮。

「うああああああ！」

一日目は、自慢の足で逃走した。

アルセが、肩を竦めてやれやれというポーズをしていたのを、視界の隅で捕らえていたが、そんなことは気にしてられない。

自分の命一番！

（一）

二日目も、草陰に隠れグルズの様子を伺う。

「今日は大丈夫？」

アルセが心配そうに、こちらの顔を覗いてきた。

このアルセ、俺が逃げていたグルズを一発で仕留めた。

この小さな体の何処にそんな力がある……。

「まあ、さすがに昨日みたいなことはしないから落ち着いたら出で

行ってみて？

「昨日は少しふざけてたんだな？」

「あはは……」

「俺の田を見ろ、田を……」

だがいつまでも、いじつてゐるわけにはいかない。
落ち着け……。

深呼吸だ。

吸って、吐いてを繰り返す。

……よし落ち着いた。

正直まだ怖い。

吼えられただけで、俺は逃げ出したのだ。

正面に立てるか……。

考えててもしようがない！

今度は自分の意思で、草陰から出る。
すると、直ぐにグルズは俺の気配に気づく。
そして、息を大きく吸い……

「「」ああ あああああ！

体が痛い。

鳥肌が止まらない。

だけど、そこから逃げない。

逃げ出さない。

情けないまねは……しない……

グルズの咆哮が止まる。

ふう、額から流れた汗を拭う。

ここからが本番だ。

グルズは既に臨戦態勢になつてゐる。

俺もいつ襲つてきててもいいように身構える。

「ゴルア！」

来た！

真っ直ぐにこちらに向かい、その逞しい腕を横に一線する。

それを反射で、しゃがんで避ける。

髪の毛の先が、風に乗って飛んでいったが気にしない。

少しでも油断するとアウトだ。

そして、また横なぎに一線。

今度はよく見て、避ける。

(こつちの番だ!)

俺は避けた勢いで、一気に懷に飛び込む。

「グルウ？」

予想外の動きだったのだろう。

一瞬、動きが停止した。

俺はその隙を見逃さない。

すかさず懷に飛び込み、打ち上げるよつに拳を突き出す。

グシャア、といやな音がした。

おそらく、中の内臓やらがつぶれたのだろう。

グルズは口からよだれを大量に垂らし、それは糸を引いて地面へと垂れる。

やがて、ビクンッビクンッと痙攣し始め、やがて息絶えた……。

まさか、一撃で倒せるとは思っていなかつた。

打ち込んだ後は一旦引いて、ヒット＆ウェイを繰り返そうとした。

だけど、一発。

それほどまでに、人間離れした力。

そして……俺は殺してしまった。

そんなつもりはなかつたのにだ。

俺は、両親を殺した犯人と同じことをしてしまつた。

もしかしたら、こいつにも家族が居たかもしれない。

そうしたら、残された親兄弟は？

殴った右腕の感触が、俺の罪の意識を再認識させる。

俺と同じだ……。

魔物も、俺も。

すると、アルセが近づいてきた。

「お疲れさまっ」

ひまわりが咲いたような笑顔を見せる。

だけど、俺の様子がおかしいことに気がついたのか、心配そうな顔つきで俺の顔を覗いてきた。

「どうしたの？」

「いや……その……なんだ」

「言いくこと？」

「そうでもないんだが……」

「無理して言わなくていいよ?」

アルセの気遣いがうれしい。

だから、俺はある決意をする。

「ありがとう……アルセ。俺、決めたよ……。アルセが出したノルマの後、俺は殺さない」

「それは……なんで?」

「俺……思つたんだよ、こいつら魔物にも家族がいるんだろうなってさ。俺と魔物とかつてさして、違いはないんだって。そう思つたら、こいつらと俺が重なった……家族を誰かに殺されてやり場のない怒りが、自分を包み込んでいくんだ……。俺は、誰にもそういう気持ちになつて欲しくない……。だから、俺は必要最低限……殺さない」

アルセはそれを黙つて聞いていた。

そして、おもむろに口を開いた。

「甘いね、すごい甘いよ?」

「うん」

「私が殺してつて言つても殺さないんでしょう?」

「うん」

俺の気持ちが伝わるよう、アルセの目を見て真剣に応える。

「この世界には常識が通じない輩がいっぱいいる。その人たちに襲われたらどうするの?」

「説得するよ」

少々、迷った後、

「ん~、甘い……けど……いいんじゃない?私は好きだよ~。そういう考え方かた……」「

認めてくれた!

それだけでもうれしい。

俺は喜びを伝えるべく、アルセを抱きしめる。

強く。

俺の気持ちが伝わるよう!』

「ありがとう、アルセっ!~!」「

真つ赤な顔を隠すように、俺の胸元に顔を押し付けてくるのは、『こ
愛嬌といつかなんといつか……。

そして、俺は残りの一匹を殺さずに生かした。

グルズの骨や内臓を碎く真似はせず、ちまちまと攻撃を繰り返した。
そうすることとで、相手の生活に支障を来たすこともなく、終わつた
あとにはアルセに頼んで、痛み止めの薬草を置いておいて貰つた。

俺は、ここでじいさんの言葉を改めて、強く刻み付ける。

”縛り”という鎖で深く、深く心に打ちつけた。

『困っている人がいたら、助ける』

人間だけでなく、なんでも、俺の手の届く範囲で助けると。

そして、俺達はこよこの世界へとたびだとしていた。

決意（後書き）

「JJK」で、よんでもくださった方々……

ホントにありがとうございます！――

感謝感激です^ ^

アクセス解析を見ていて、こんな小説をみてくださる方がいても
らえるだけで幸せです

ありがとうございます

これからもよろしくお願いします

例の「JJK」、感想や誤字脱字など気軽に吐き捨ててってください

待っています！

旅立ち（前書き）

今回で森から抜け出します

司狼君の口調が安定しないorz

早く固定せねば……

旅立ち

グルズを無事に3体倒し、アルセは約束どおり、この森から出ようと言った。

もちろん、俺は断る理由はない。

二つ返事でオーケーした。

そのために、グルズを倒したんだし、早くこの世界を見て周りたかった。

そして、もはや定番になったフェンの亡骸の前。

ここが一番安全で、俺達の寝床になっているからしょうがない。

うん、しょうがない。

「え~と、それじゃ持っていくものは……」

そつと置いて、リュックにいろいろな物を詰め込んでいく。

食料や硬貨、薬草など旅に必要そうなものを突っ込んでいく。

おいおい、そんなに入るのか？

すでにリュックはパンパンだ。

だが、アルセはかまわず突っ込んでいく。

ド ハモンの秘密道具？

まあ、いいや。

突っ込まないでおこう。

「あ、そうだ！ 司狼！ お父さんの爪を貰つてきて？」

「ハア！？」

「いや、だつて司狼は武器を持つてないでしょ？ 私達、天狼族は……特にお父さん”天狼王”だった、お父さんの素材は、切れ味や耐久力も最高級のかなり強い武器が作れるの」

「それで爪？」

「そうつ！」

そういうて、胸を張る。

タコンと胸が揺れるから、目に悪いです、アルセ……。

俺はそんなアルセから、微妙に目をそらしながら、

「売ってる武器とかじやあ、ダメなのか？」

そうすれば、わざわざフロンを傷つけずに済む。

「そうでもいいんだけど……いいのも、そう簡単に売つてないし……」

「…」「

「たまゝに、ホントにたまゝにだけど、魔族が呪いをかけてたり、

誰かが死んだいわく付きの武器だつたり。それに……」

「それに？」

「真面目な話、生半可な武器じや司狼の力に耐え切れないの。もう自分の力が常人からかけ離れてるのは分かるでしょ？」

「こくんと頷いておく。

「だから、お父さんを使うの」

なるほど、ノコギリみたいなものか。

ノコギリも、コツを掴むとほとんど力を入れずに切る事が出来る。だけど、なれない初心者はわからないから、力の限りやるつとする。そうすると、刃こぼれも早い。

つまりはこういうことだ。

過ぎた力は、壊すだけ。

いや、ちょっと待てよ？

「アルセの武器は？」

「私？ そんなの持つてないよ？」

「え！？ なんで？」

以外だった。

武器は大切だ。

見たいのことを言つてるから自分も何か使つてているのかと思つたのだが……。

「私には魔力があるからっ！」

「魔力？」

よく漫画の主人公とかが、使う便利な力がある。さすが、異世界。

そんなのもあるとは。

「魔力って言うのは、やつするに世界と干渉できる量みたいなものだよ？ ようするに……」

……ふむ、アルセの話を聞いている限り。

この世界でいう“魔法”とは世界から力を借りているという感じらしい。

魔力が高いほど、世界との仲は良くなり様々な力を貸してくれるといふことだ。

要するに、フエンから魔力なしと言われた俺は世界とは仲良くなれない。

逆に魔力がある、アルセは世界と仲良し。
簡略すると、そんな感じらしい。

「要するに、魔法を使うから、武器は必要ないと？」

「そうそう、私の魔力って高めでね？」この世界でも十の指に入るくらいなの。だから、大丈夫っ！」

自分には下手な武器より、強力なものがあるってことか。

まあ、いまいち魔法とか実感がわからないが、本人が大丈夫と言つてるんだから大丈夫だろう。

「んじゃ、ちょっと貰つてくれる」

「ん、もらつてら」

……略語つて異世界でも使うのな。

そして、準備を再開したアルセを背に、俺はフエンの近くに寄つた。独特的の獣臭の中に、乾いた血の匂いが鼻を刺激する。あれから、一ヶ月近く経つたが気高い狼は、そのままの威儀を残して、立ち続けていた。

俺は一言、

「『めん……』

と、断りを入れると、自分の腕よりも大きく、太い鋭利な爪をフエンの体から、引きちぎった。

剥がす際にブチブチブチッと筋肉と纖維が、千切れる音がしたが、もともと獵師まがいのことをしていたため、あまり気にしない。心が痛いことは変わらないが……。

続けて、二本目を掴み……千切る。

「貰つていいくよ、フエン」

抜いてしまった2本の爪があつた場所——今は肉がむき出しになつている——を痛々しく思いながらも、御礼を言つた。

2本の爪を両肩に背負うと、想う。
重い。

フエンの爪は重い。

重量的に重いのではなく、精神的に。

この爪で、今まで、どのくらいのものを壊したのだろうか。今まで、どのくらいの種族を壊してきたのだろう。この爪で、どれほどのことをしてきたのだろうか。そして、この爪でどれほどの命を守ってきたのだろうか。爪は、所々が欠けていたり、変色したりしていた。それは、この人が世界を種族を守つてきた証。この人に負けない強い男になろう、そう思つた。

まだ見ぬ武器、これから共に戦場を駆ける相棒に思いを馳せて。

アルセの所に戻ると、もう荷造りは終わっていた。
ちらつ、とリュックを見る。

あれ程パンパンだつたりュックは、スラットシティア……。
よし、ツツコムよ？

いい加減にツツコムよ？

「そのリュックは何なの？」

「へ？ これ？ これは、”バッキュー”っていう旅のお供だよっ！」

リコックをこっちに見せびらかすように、見せてくれる。

「これはね、中が異次元に繋がってるの。だ・か・ら、この通り。まったくふつくらとしないでしょ？」

「なるほど、納得」

まあ、リコックは置いとく。

「とりあえず、2本持ってきたよ。これで大丈夫？」

「うん、十分だよ？……重いでしょ？」

最後は、聞こえづらかつたがしつかり聞こえた。

「うん。重いよ……」

アルセもちゃんと、分かっているようだ。

それもそうか、父親だもんな。

「お父さんはね、自分の体一つで、これまで戦つてきたの。暴れる魔物を討伐したこともあるし、戦争に単身乗り込んで、終わらせたこともあった。そうやって、強引ながらもお父さんはいろいろなのを守つてきた。だからね——」

そこで俺は遮つた。

言おうとしてることは分かる。

「俺にもそうあって欲しい……だろ？」

小さく頷く。

「大丈夫。最初は小さなことしか出来ないかもしない。いや、それしか出来ないとと思う。だけど、俺はあきらめないよ？俺の血に、魂に、フェンが宿つてゐるんだから、そんな恥ずかしい真似できるわけないよ。俺は絶対に、フェンと肩を並べる。約束するよ」

フェンから貰つたこの力。

無駄には絶対にしない。

「なら……大丈夫だねっ！頼むよっ！——司狼——！」

そういうと、手の平をこちらに向け、上に上げた。

……そういうことか。

俺はニヤッとする顔を、こらえながら同じ風にする。

「こくよ——」

「ああ！！」

ハイタツチ。

パチーンと心地よい音と共に手を合わせる。

こうして、俺の短くも、内容の詰まつた一ヶ月は終わった。

人助けの旅。

楽しみだ。

旅立ち（後書き）

まずは、ここまで読んでいただきありがとうございましたー。

所々おかしいかもしませんね

申し訳ありません

誤字・脱字などがあればよろしくお願ひします

次の更新は……未定ですね

人の階級（前書き）

初めての方、そうでない方もこんばんわ！

この話から、やっと冒険にでます

なにぶん初めてのことだ、表現が幼稚だつたりして情景が想像しきれいところもあるかもしれません、どうか最後まで読んでいただければ幸いです^ ^

では、お人よしのオオカミさん、新しい章をお楽しみ下さい

人の階級

（in 馬車）

白銀の森を出て、俺達は直ぐに通りかかった馬車を捕まえて、アルセが言う村に向かおうとしていた。

馬車……といつても、馬が引っ張っているのではない。

だから、実際は馬車といっていいのか、少し迷う。

俺達が乗っている荷台を引いている生き物は、”小龍”という、種族らしい。

トカゲのような姿で、発達した足が特徴の生き物だ。

飛びことをしなくなつた彼らは、羽は小さく縮み、代わりに全体重を支え、早く行動するために発達した足は、人や荷物が入つた荷台をも、簡単に引くことが出来る。

まあ、”龍族”と決定的に違うのは、争いを好みということらしい。

さつきから、「らしい」を連発しているのは、俺が知っていたのではなくて、隣にいる少女、アルセが教えてくれているからだ。

目つきは厳しく、怒つているように見えるが内心は可愛いもので、天真爛漫の女の子だ。

馬車に揺られて上下に揺れる胸や、さらさらと流れる様に揺れる銀髪は彼女の魅力を引き立てている。

しかし、ただの女の子ではなく、”天狼族”……自在に狼の姿になつたり、人間の姿になることができ、許容している力や魔力も普通の種族よりも、一頭抜けた種族だ。

フェンー天狼族の王一が俺に力を与えてくれた時から、いろいろとお世話になつてている。

俺は見るもの見るのが珍しく、ほとんどのことをアルセに聞いている。

そんな細かいことにも、いやな顔をせずに教えてくれるアルセはやっぱり、優しい女の子だと思つ。

「なんだい、そんなに外の景色がめずらしいのかい？」

と馬車を、操縦してくれている初老の男の方が言つ。

「そうですね、こっちに来たのは初めてなので、見るものが珍しくてつ」

自分でも少しテンションが上がつてゐるのが分かる。

「そうかい、それじゃあ、ゆっくり行こうかね」

そう言つて、馬車の速度を少し落としてくれる。

「すみません、ありがとうございます！」

緑豊かな草原に、鬱蒼（うつやつ）と生い茂る森。

誰も住まず荒れ果てた荒野に、人が居てがやがやと盛り上がる街。

そんな、初めて見る景色は、ゆっくり……ゆっくりと過（あ）ぎていった。

「廃れた街”ポアー”」

目的地に着くと、乗せてくれたおじいさんに別れを告げて、ひとまずこの町の宿屋を探していた。

「おつとつー？」

何かに躓いた。

木片だ。

しかし、転がつてゐる木片はこれだけではない。

所々に、大きいものや小さいものまで、転がつてゐる。

というのも、この町が……言つては悪いが、ボロイのだ。

この町に入るとき、町を表す看板も斜めにかかつており、強い風に吹かれれば直ぐに落ちてしまいそうだった。

家々は、所々煤けており、穴が開いていたり、屋根が無い家まである。

そして、全くといつていいほど人気が無い。

「アルセ、この村は？」

隣に歩くアルセに話しかける。

「ここはね、世界で一番階級が低い村なの」

「階級？」

「そう、人型種族の中では階級みたいなのがあってね？ここは、一番低い種族……人間が住む町だよ？」

「は！？」

人間が弱い？

「人間だった司狼には、少しつらい町だよね……」

そういうて、表情を曇らせた。

「人間はね？ 力も弱いし、魔力も使えない。時々異例で魔力を持つて生まれて来る子もいるけど、大体は人間だからと迫害されるの。力が欲しいなら、力が強い種族を使えばいい。魔法が欲しいときは、魔法が強い種族を使えばいい。この世界では、そんな考え方方が当たる前なの」

なんだよそりや……。使えないやつは引っ込んでろってことか？
そう思つた途端に、血管が熱く滾る。

息が荒くなり。

血液もいつもより、流れが速くなり、全身に熱い血液が循環する。

「……」

「だから、何事にも劣つてていると思われている人間は、結果的に最悪の階級になつてしまふの……。司狼？」

俺の様子がおかしかつたのだろうか。

話をやめて、呼びかけてきた。

「大丈夫？」

心配そうに顔を覗きこんでくる。

「ごめん、少し待つて……」

胸に手を当て、落ち着こうと目を閉じる。

落ち着け、落ち着け。

そうすると、熱かった血液もだんだんと冷めてくる。

大丈夫だ、問題ない。

一瞬知らないお兄さんが瞼の裏に見えたが、気にしないことにした。

「大丈夫つ。心配ないよ」

そういうて、アルセに笑顔を見せる。

「本当に？」

「大丈夫だつて、さすがにショックだつたけど、大丈夫」

「力つと笑つて見せると、アルセは柔らかい笑みを浮かべた。

急にそんな顔をされたのでドキッとして、話題転換をすることにした。

「それにしても、この村には何しに来たの？」

「あれ？ まだ言つてなかつたけ？」

「言つてないよ……」

またか……。

ハアとアルセに聞こえるほど、わざとらしくため息をつく。
「あれえ？ アハハ……。馬車の中でしゃべつたと思うのにな」
最後の方は下を向いて、ぼそぼそとしゃべつていた。

「お～ま～え～は～、また用件をひ…」

罰として、こめかみに拳を当てぐりぐりと捻じ込む。

「いたいっ、いたいっ、いたいっ」

いやいやと振りほどこうするが、俺の方が力は強いらしい。
がつちりホールドして、逃げられないようにする。

「ちゃんと、用件を言つてから、行動してな」

あまりやりすぎるのも、可哀想なので離してやる。

「あう～」

涙目でこめかみを押されて、可愛く唸る。

「くすんっ。とりあえず、立ち話もなんだし宿に行こひ～？」

「それもそうだな」

これだけ騒いでいて、まだ人を見ていないというのも少し気になる
が、とりあえずこの村に来た理由を聞くために俺達は宿屋に移動した。

隣を歩くアルセが
「あの力はいつたい？」
そうつぶやくアルセの声はよく聞こえなかつた。

人の階級（後書き）

「」まで読んでくださった方ありがとうございます♪それこますへへ

この小説も、PVが2300

ユニークが550と、嬉しい結果になっています

パソコンの前で、本当にありがとうございます

これからもがんばっていいくのよろしくおねがいします

話に戻すと、司狼君

実はまだ、秘密があります

この章でその秘密も明かされるでしょう！

例の「」とく、誤字脱字があれば訂正します

遠慮せずに申し立ててください

よろしくおねがいします！

人の階級 → アルセ → (前書き)

今回は初めて別のキャラからの視点で始めたいと思います

進むと思っていた方もうしわけありません

よろしくおねがいします

人の階級 ～アルセ～

～人の階級 アルセ視点～

今、私の傍らには男の子がいる。

名前は司狼。

異世界からお父さんが、呼び寄せてお父さんの力を受け継いだ人。前髪を隠すように、少し伸びた前髪。漆黒を思わせるような深く深远の黒い髪。包み込まれるような漆黒の瞳。私よりも背が大きく、異世界で鍛えていたのである。やせ細つていて見えて、その下にある屈強な体はとても頼もしく思えた。

お父さんの力を受け継いだ司狼は、その力に溺れるでもなく、逆にその力を人助けに使ってくれるとも言つてくれた。

嬉しかつたんだよ。

司狼。

お父さんの力は、强大。

一国を、半日で壊滅させられるほどに……。

それを、金目的や殺し目的で使わずに、「必要最低限……殺さない」と言つたのは、司狼が優しいからかな。

信じてるよ。

司狼。

……でも、その後に抱きしめられたのはさすがに恥ずかしかつたかな……。

私だって女の子なんだよ。

司狼はこの世界のものが珍しいらしく、いろいろなことを質問してきた。

「あの街は何？」

「あの生き物は？」

「今どこに辺り？」

などなど。

この世界に興味が尽きないらしー。

私はそんな司狼の質問に、この世界を好きになるよひに、丁寧に質問して言つた。

竜車を操つている初老を迎えた老人が、「それじゃあ、ゆつくり行こうかね」と聞くと、司狼は

「すみません、ありがとうございますー。」

と元気な返事をした。

外の景色に夢中になつてゐる司狼を、老人と一緒に温かい日で見守つていたのは司狼には秘密だ。

白銀の森を出て、竜車に揺られ、少しすると遠くから見てもさみしいと感じる町が見えてくる。

最低の階級を持つ人々が住む町”ポアー”。

いつ来てもこの町は好きになれない。

町には活気なんてものはなく、人々は食べ物にさえ飢え、壊れたもうもろのものは捨てられずにそのままになつてゐる。

町に入ると、司狼は足元に転がつてゐる木材に躊躇、転びそうになつてゐた。

それを、不思議に思つたのか辺りを見回し、私に質問をした。

「アルセ、この村は？」

まあ、当然の質問だらうね。

だから、私は胸が痛んだもののこの世界の階級について、話し始めた。

だけど、

「だから、何事にも劣っていると思われている人間は、結果的に最悪の階級になつてしまふの……」

と私が話していると、周囲の空気に圧力が増してくる。

全身にかかる圧力は、私の行動を制限する。

痛いくらいの空気。

全身を殴られているような感じ。

その圧力を放つてるのはもちろん。

司狼。

歯をギリッと噛み締め、拳は限界まで握り締める。

漆黒の髪は、ピンと逆立っている。

今までで、初めて感じる感情。

——恐怖。

目の前の男の子が怖い。

今すぐにここから離れたいぐらいの殺氣。

これが……人間？

いや、司狼はもう既に人間ではない。

では、天狼族の力？

それでも、たつた数ヶ月でここまで怒氣を出せるのか？
わからない、そもそも”継承の儀”自体私はよく知らない。

このことについては後から考えよう。

今の問題は目の前の司狼。

「大丈夫？」

となるべく刺激しないように優しく声をかける。

一瞬、驚いたような顔をしたが、

「ごめん、少し待つて……」

といい、胸に手を当て深呼吸をし始めた。

二、三回吸つて吐いてを繰り返し、落ち着いたのだろう。

一瞬、顔を歪めたが、どこか苦しいというわけでもないだろう。

瞼を開けるといつもの司狼の顔があつた。

私を拘束していた圧力はすっかり消え去り、開放感を得た。

もう大丈夫だというので、

「本当に？」

と聞くと、

「大丈夫だつて、さすがにショックだつたけど、大丈夫」と笑ってくれた。

だから、私も笑つて見せた。

顔を真つ赤にさせてそっぽを向いているけど、私おかしな顔をした？
おかしな司狼。

「それにしても、この村には何しに来たの？」

「あれ？まだ言つてなかつたけ？」

おや？

「言つてないよ……」

わざとらしくため息をつく。

「あれえ？アハハ……。馬車の中でしゃべつたと思つのにな」と苦しみ紛れの言い訳。

本当は言つていない。

ごまかすように最後は小声で！

「お～ま～え～は～、また用件をつ！」

と俊敏な動きで私の体を拘束し、こめかみに拳を当てる。
司狼が密着してる。

そう思つたが、襲つてくるのはこめかみに激しい痛み。
いたい！いたい！

なにこれ！？

「いたいっ、いたいっ、いたいっ

なんとか、はがそうとするがそもそも行かない。

司狼が人間なら楽勝なのだが、今はもう天狼族に近い。

男と女だ。

勝てない……。

少しショック。

だから、少し魔法を使おうとして……やめた。

大人気ないし、司狼とくっつけるのはいいし……。

痛いけど……。

「ちゃんと、用件を言つてから、行動してな

そういうと離してくれた。

少し寂しいがそれよりもこめかみが痛い。

「あう~」

なみだ目になつているのが自分でも分かる。

「くすんっ。とりあえず、立ち話もなんだし宿に行こう?」

「それもそうだな

特に反対するわけでもなく賛成してくれた。

所々人の気配がしたが、司狼が殺氣を放ち始めた時点でもの子を
散らすように逃げていった。

司狼は気づいてないんだろうな……。

とりあえず、宿に行くことにした。

それにしても、

「あの力はいつたい?」

少し調べて見よう。

そう思った。

人の階級 ～アルセ～（後書き）

割と早めの更新ですか？

テスト期間中になにしてんだ（殴

まあ、本格的に入る前に更新しておきたかっただけです！

今回は別視点からの、物語に挑戦してみました

どうでしたか？

お楽しみいただけたでしょうか？

少しでも楽しいと思つていただけたのなら幸いです

そして、毎回見てくださつてている方々

お気に入りについてくださつている方々

本当にありがとうございます

がんばつて物語りを楽しくしていいつと思つのでよろしくおねがいします！

例の「～と～、誤字脱字や感想などがあれば遠慮なく言つてください

次の更新は……未定です ～

助けを呼ぶ声（前書き）

誤字・脱字・修正箇所があれば指摘をお願いします

助けを呼ぶ声

（ポア一 広場）

階級について説明があつた後、なんとか落ち着いた俺はアルセと並んで宿屋に向かつて行った。

それにしても人が居ない。

少しは歩いていると思うのだが、未だに人に会っていない。がらんとした静かな町は、少し煤けて見えた。

その焦燥感が少し嫌で、俺はいつもより口数が多くつた。

「それにもアルセ？」

「え？ 何？」

「いや、アルセの服もどうにかしなくちゃなと思つてせ」隣で歩くアルセに声をかける。

そうなのだ。

アルセは俺が、貸した上着を羽織つているだけ。

上着の胸部分は、形の良い胸に押され少し窮屈そうで、下着もなし。俺が少し長めの上着を持っていたから良かつた物の、少し動けばいろいろ危なかつた。

「えへ、だつて下着とか着けると窮屈なんだもん」頬をふうと膨らませて抗議する。

「いや、だつて……恥ずかしくないの？」

「ぜんぜんっ！ だつて私、見られるのは平氣だもん」

そういうことらしかつた。

仕方ない……。

「それじゃあ、俺はアルセを見ない。恥ずかしいもん

「え？」

「俺の国ではね、女性は恥じらいを持ってつて言つのが慣わしじね。はしたない子は、もう見ません。」

そういうと、俺はアルセからふいつ、と明後日の方へ視線を向け

る。

「え？え！？いや、嘘だよね？同窓つーそんなことしないよね！？」

۷

「ひつちを見てつ！？」

服の裾を引っ張つてきてるけど、気にしない。

「あの……じゃ、じゃあパンツは着けるー?」「ー?」

〔 〕

「……」れもダメ? そ…… それじゃ、ちゃんと、マント羽折る。羽織る

から、ね!?

お、おそれ。

家の屋根に止まつてゐる鳥糸の魔物達は夫婦かな?

一匹が氣を引こうとしてるけど、もう一方は動く気配がない。

服とかしたぎとかちやんと着るから。」おち見てよ

う し ろ う

あ、相手にされなくてしょんぼりしてる。がんばれ。

グスツ

「アーティスト」

閑話休題

明後日なんか見てる場合じゃない！

卷之三

あでやか、アレハニ、一機兼ねばか

おれがら ブリセにご機嫌ながため
頬を膨らませて、俺の少しあ歩歩いてる

糸を脇に走せて他の糸に先を争っている

人と語ができると少し期待しながらだけと……全然人が居ないし

「それは……」司狼がさうき怒気を振り撒いたせいだけれど、

二〇

ボリとしていたので、上手く聞き取れなかつた。

「なんて言ったの？」

「知らないこつ！」

「まあ、いいけど……」

ピューー

そう話していると、小さく風が吹いた。

これは……

「アルセ……」

「うん、わかってる。行くんでしょ？」

流石つ！

さっきまで怒っていた顔はビックりやひ。真剣な眼差しで行けと訴えている。

——風に運ばれて来たのは声。

「……やめつ……な……よつ！」

「いし……から……こつ！」

どこか、争うような声。

片方はもがいているような必死な声だ。耳を澄ます。

「やめな……やつ……つ……！」

もつとだ……。

集中しろ。

その声だけに集中する。

「やめなさ……離し……」

もつとだ、もつと！

「やめなさこつ……離し……こつ……」

もつと！

「……誰かつ！助けてつ……」

俺は知らずの内に走り始めていた。

助けを求めているなら、助けよつ。
それが、俺が生きている理由だから……。

助けを呼ぶ声（後書き）

ユニーク数が1000を突破！

毎度みてくださる方々本当にありがとうございますー。

そのおかげで心が折れずに、毎回更新できていますー！

ーー

前にもいいましたね（笑）

テスト期間になにやつてんだつ（殴

しょ「うがないじゃないですか？

テストやつてる間も考えちゃつて、テストの問題用紙にびつしりー！

そりゃもう、更新するしかないですよね^_^

今回は、アルセとの少しの絡みと次につなげる話でした

なかなか進みませんね（汗

すみません

テストが終わつたら、また更新するつもりです

では、感想などお待ちしております

あ、最近仮面ライダー面白いですよねっ！

では、誤字脱字などストーリー構成などよかつたやつまらなかつた
の感想をお待ちしております^ ^

初めての人助け

（ 広場）

司狼達から少し離れた場所。

村の中心に位置し、そこは少し開けた場所になつてゐる。

そこで、一人の女性とその身長を遙かに超える身長の大男がいた。大男は女性が逃げられないよう、腕を掴んで空中にぶら下げている。

「誰かつ！助けてっ！！」

「ハハハッ！誰も助けてくれるわけ無いだろ？こんな屑の溜まり場でっ」

「この町の悪口言ひなつ

「だまれっ！」

パチンッ

大男は捕まえている女性を叩く。

叩かれた頬は徐々に赤みを増していく。

皆が広場と呼び、普段であるならば、談話したり通行人で賑わつてゐるのだが、今は死刑執行時の様な重苦しい雰囲気が広場を包んでいた。

広場には、女性と大男一人しかいない。

周りの家屋には人がいるのだが、恐れをなして止めに出て行くことは出来ないでいた。

そして女性はキッと大男を睨み付ける。

「黙るものかっ！この町も人も誰も馬鹿にさせないっ！キサマの様なクズに馬鹿にされてたまるもんですか！」

「んだと！？テメエ……それ以上言つて見ろ。ただじやすまさねえ

ぞ……」

大男は醜悪に満ちた顔で、頬を三日月型に吊り上げる。

そして視線を彼女の体のいたる所に向ける。

そして頭から足まで見終わると、

「そうだなあ……お前高く売れそうだなあ……性格は調教するとして……その色気満点の脚。ソソルぜえ……」「つー?」

女性に何とも言えない悪寒が走る。

生理的に受け付けないものが目の前にいる。

——氣持ち悪い——

だがそう思つても言えない。

先ほどから氣の強そうな発言をしているものの、足は生まれたての子鹿のようにガクガクと震えている。

震えが伝わらないように虚勢を張る。

大男は怯えていようと、馬鹿にされていようと余裕を崩さない。なぜなら種族からして桁が違うのだ。

大男の種族は獣族。

しかもその中でももつとも強いとされるミノタウルスだ。

ミノタウルスだという証の捩れた角に。

丸太の様に太い足と腕は岩を容易に砕き、鍛え抜かれた胸筋は刃物さえも跳ね返す。

そんな化け物に、一般男性に勝てるかも分からない女性が勝てるわけが無い。

「離してっ、離しなさいーー！」

足を必死に揺らして抵抗する。

だがしつかりと掴まれており、抜け出すことが出来ない。

「ほらほらーあ、逃げだそなんて考えるなよ？俺が本気になればこんな村直ぐに潰せるんだからなあ……」

やや興奮氣味に言ひ。

実際この言葉は冗談ではない。

魔力や力を持たない人間が獣人などに立ち向かえるはずも無く多種族の盗賊などに狙われ全滅した村も少なくはない。

抵抗を止めブランと空中に垂れる。

だが視線は、ミノタウロスを殺さんとばかりに鋭い目を向ける。

「そうだなあ……売り払う前に、味見でもしておくかあ」

「國語」卷之二十一

凄まじいほど嫌悪感。

好きでもない男に裸を見られるという屈辱。

仕事一途にこだわる無人感

だが、彼女の服が脱がされることは無かつた。
なぜなら、

「アーティスト」

「ぬお！？」

誰かも分からぬ、この場にそぐわない陽気な声が聞こえたと思つ

その瞬間、突然この浮遊感に襲われた

「もとへ一.^ム」

彼女の体は地面に落ちることは無い。

彼女が目を開けるとそこには、自分をお姫様抱っこする黒髪の少年と、吹っ飛ばされたのか少し先でお尻を突き出して寝転んでいるノタウロスだった。

あの時聞こえた声は、気のせいではなかつた。

アルセに先に行くと伝え少し走ると、腕を掴まれて宙ぶらりんにされている女性と、服を脱がしに掛けている角を生やした大男がいた。

迷う必要なんかない！

突撃いいいい！！

俺は更に速度を上げ、

「そいやつさ！」

「ぬお！？」

大男に足から突っ込む。

いわゆるドロップキック。

ドロップキックは上手く腰にめり込み大男の体が、くの字に曲がる。そして、勢いよく吹っ飛んで行った。

吹っ飛んだ大男は土ぼこりを上げ、ズサーーーと地面とキスをしたが今は見ていない場合ではない。

大男の腕を離れ宙に投げ出された彼女を包み込むように抱き上げる。

「大丈夫？」

まずは怪我が無いか確かめなくちゃね。

だけど、彼女はふるふると頭を振るだけ。

なんとか喋ろうとしてもパクパクと声にならない声を出す。触れている手からわずかな震えが伝わってくる。

俺が今出来ることは……

「もう大丈夫だよ？だから安心して、ね？」

ただ安心できるような言葉を喋ることだけ。

「司狼っ！」

「おっ……アルセ良いタイミングだ。この人を頼む」

そう言ってアルセに彼女を引き渡す。

「わかった！まかせてっ」

グッと親指を突き出してきた。

だから俺も、

「任せたつ」

親指を突き出して応えてやつた。

「ググつ……！ 一体何が……」

大男は蹴った場所を押さえながら、よろよろと立ち上がった。

「起きた？」

「キサマか!? 俺様を突き飛ばしたのはー!..」

「うん、そうだよ?」

「キサマは、誰を突き飛ばしたと思ってるんだああああああー!..」

大男は怒りに顔を真っ赤にさせる。

唾がここまで飛んでくる。

ちょつ!?

汚い!、汚い!

「気をつけて、司狼。あれはミノタウロス。力が自慢の種族よ」

「オーケー。わかった」

「暢気に話をしている場合かああああー!..」

ミノタウロスはその豪腕を、俺めがけて叩きつけてくる。

当然のこと俺はよける。

だがその豪腕をミノタウロスは止める」となく、地面を叩きつける。メキッという音と共に地面に穴が開く。

ミノタウロスが拳をどけるとそこには拳大の小さなクレーターが出来ていた。

「やるね

「フンつ当たり前だ。俺様はミノタウロスの中でも最も力が強かつた男だからな。今なら泣いて土下座したら許してやらんことも無いぞ?」

「冗談つ

せせら笑うよつこ、ミノタウロスを見る。
ふむ。

力に自信があるよつだな。
どうするか……。

いくら、力の強い種族としてもおそらく俺が本気で殴ればただの
肉片に成り下がるだろう。

だが、俺はそんなことはしたくない。
命を無駄に刈り取つたりはしない。

なら、俺がとる道は考える中で一つかな。

「ねえ、おじさん？」

「なんだ！」

「泣いて謝るなら今のうちだよ？」

「ふざけるなっ！」

ミノタウロスは姿勢を低くし、一けじて突進をしようとする。
だがその前に……

「止まれっ！！」

俺は大声を発した。

これが指す意図は、

「つー？」

やつの一瞬の停止と、こちらに視線を向けさせること。

そして俺は、足を上げ地面に向けて踵を落とす！

ド「コオオオオオん！！

瞬間、地面が爆ぜる。

やつの様に地面にめり込むのではなく、地面の方が爆ぜる。

そして、そこにはやつと比較にならないクレーターと、顔面を真っ
青にするミノタウロスの姿があった。

「なつ……はつ……なつ……」

上手く言葉が紡げない様だ。

「大丈夫？」

手を貸そうと近づいていく。

「クッ……来るなあああ！？」

田にも留まらぬ速さで、立ち上がり田漢に似合わない速度で逃げていぐ。

「おや、少しあつすぎた？」「やりわざつ」

「イタツ」

いつの間にか後ろにいたアルセが、ジャンプして俺の頭を叩いた。
「どうすんの！？町に穴が開いてるじゃない！――！」
「いや、結構手加減したんだけどなあ……」

「あれで！？」

俺が作ったクレーターを指差しながら驚くアルセ。

「あのう？」

さうに文句を言おうとしたのだろう。アルセは行き場を無くした指をあつひこちしながら、声を発した主を見る。

「もう大丈夫？」「

これは俺だ。

「ああ、その……感謝するよ」

彼女はぺこっと頭を下げた。

初めての人助け（後書き）

ふい～

長いですねえ……

飽きてしまった方申し訳ありません

初の戦闘？の場面でした

戦闘と言つていいんですかねえ（笑）

まあ、そんなこんなで同狼君ムキムキです

屈強な人にも負けません

テストも無事に終わり、今度から自由に投稿できるでしょう
では誤字脱字や感想などがあればよろしくお願ひします^ ^

疑惑（前書き）

「なぜんわつ

お久しぶりですへへ

少し短めです

いろいろはあとがきで書いたとおりのドキュメント書かれは闇江戸で書いたと
います

それではお楽しみにそれこそ！

「それでは、改めまして。私はサビィ・ハーデと申す。助けてくれてありがとう、助かつた」

そう言って目の前の女性、ハーデさんは関白ながらも深々と頭を下げた。

その際に彼女の栗色の髪は、クセ毛なんか先の方は丸まつており、ゆらゆらとまるで海草のように揺らめいていた。

「いえいえ、気にしていいですよ?」

本当に申し訳ない顔をしてこちらを見つめてくるので、じつちが何かしたのかと自問自答してしまう。

「それに宿屋まで連れてきてくださったわけですし」

背もたれの無い煤呆けた木製の椅子。

丸型の机に椅子が四つ囲むように置かれている。

そして現在地はこの町、プラーに唯一ある宿屋。

ハーデさんに着いてきてと言われて、着いて行くと他の建物よりは生活感がある家に着いた。

傾いたドアを開けると食堂に通された。

「そうか……それは助かる。何かくれ何て言われても困るといふんだ。なんて言つてもここには何もないからなあ」

そういうつて自嘲するように呟いた。

俺もどういう顔をすればいいのか。

顔が引きつって苦笑いになってしまった。

「そんな事より少年……キミは一体何者だ?」

先ほどまでとは一変、こちらを射んどばかりに視線を強める。先ほどまで友好的だったのにその態度はビックりやう。どうしようか……。

正直バラしてもいいのか迷う。

するとアルセがハーデさんからは机の影で見えない俺の太股に指を

添えた。

何々？

……し・や・べ・つ・た・ら・お・ろ・す。

ふむふむ。

訳すと？

……喋つたら卸す。

何を！？

何処を！？

焦つた俺はアルセの太股に手を添える。

「ひゃんっ」

するとアルセはビクンッと体を跳ねた。

パチンと手を払われてようがなく手を収めた。

「何をしている？」

「おつとそういうえば。」

アルセに視線を送る。

アルセはこくんとうなづくと絹のよつに美しい白銀の髪を揺りして、俺の代わりに喋り始めた。

「この人の名前は春原 司狼といいます」

「待て、今なんて言つた？ 名前か？」

「え？」

「ああ、すみません。こちらの大陸ではあまり使われない名前でし
たね」

「うむ」

ハーデさんは腕を組み素直に頷いて見せた。

「どういつこと？」

「司狼の名前はここよりもずっと遠くの大陸で使われてこる名
前なの。ここでは通じないの忘れてたつ」

「え？でも、アルセは普通にわかつてない？」

「それは私がお父さんに着いていろいろな大陸を回っていたから。
ちなみに言つと司狼の名前が通じるのはジパングっていう国だよ？」

「へえ～」

「それで……すみません、話が脱線しましたね。彼の名前はシロウ・スノハラです」

「ふむ、では最初の質問に戻ろつ……キミは、何者だ？」

「……」

とりあえず俺は黙つておこう。

この世界のことはまだよく分からない。

そういうのも含めてアルセに任せたほうがいいだろう。

「私でさえ抗うことのできなかつたミノタウルスを上回る腕力。やつが恐れをなして逃げていく様などそう見ればしない。それに、キミは町中で村のみんながその場から動けなくなるほどの殺氣を見せたようだな。みんなはキミを恐れているぞ？」

そんなことに！？

今まで人に会わなかつたのはそういうことなのか！？
アルセのバツと見ると、肩を震わせて顔を背けていた。

「ふふつ、ふつ……」

「笑うな！？」

「いい加減にしろつ！！」

鼓膜が裂けるのではないかという声量。

頭の中にキーンという音が響いて頭がトンカチで叩かれたようにがんがんと痛む。

「こちらは眞面目に話しているんだつーキミ達が一体何者なのか！？それがはつきりしない限りは、私も……町も安心していられなんだ！！」

「それは……」

「喋ることが出来ないのなら出て行つてくれー」この町のためにつ興奮したようにハーデさんは整つた顔を怒りに歪めて、こちらを怒鳴る。

少々緊張感が足りなかつたか？

それもそうだな。

新鮮な景色とかいろいろなことを見たり聞いたりしていろいろ浮かれていたようだ。

周りがまったく見えていなかつた。

反省しなければならない。

だから喋るうとした。

だけど口が重い。

それもそうだ、町を守らうと必死になつてゐる者と一人ではしゃいでいた者では語る言葉の重みが違う。

俺が今喋つても、それは曲げると直ぐに折れるような木の枝のようにな中身がすかすかだ。

俺は下を向くしかない。

……クソッ。

ハーデさんに怒つてゐるのではない。

自分にだ。

「まあまあ、まずは落ち着け。ひじやありませんか？」
と、物腰の柔らかそうな声と共に、田の前に立つと優しくティーカップが置かれた。

鼻をつく甘い匂いと、ぬらぬらと湯気から伝わってくるひょうどいい温かさが心にしみる。

「こんな時にそんなことを言つてゐる場合かー？」
俺はこれを置いてくれた方を見る。

そこにはこじで着るには、浮いてしまうのではないか？

燕尾服に身を包んだ、白髪の老人がいた。

疑惑（後書き）

ハイっ！

お久しぶりです^w

長い間放置して申し訳ありません

一週間に一回は更新できるようになりたいです

毎回見ていただいている方々へ、ありがとうございます！！

お気に入りをしていただいている方も一つと登録していただけて
おります

本当にありがとうございます^_^

僕もあと少しで一万へ行きました

ちょうどここ切りで番外編みたいなものも書いて行けたらな？と思っています

欲張りですみません(汗)

それでは、感想など受け付けております

また誤字脱字などがあれば申し付けてください

すぐに直します

それではノシ

おめでたまつ事（繪書也）

早い段階で更新します

一万アクセスを無事に超えました

お気に入りにしてくださいの方々、応援してくださる方々に深く感謝の言葉を……

お互いに隠し事

「そんなことを言つている場合か！？」

ハーデさんがその白髪の老人に叫んだ。

老人は穏やかな顔を浮かべ、髪をオールバックにして上げている。こちらを優しそうに見守る空のように青い瞳は包み込まれるような不思議な感覚に襲われる。

そしてこの町で初めてみた服と認められるような燕尾服。

この町の人々は大体ボロ布をワンピースのような形で着ているのだがこの老人は黒を身に纏い正直に言うとこの町から少し浮いていた。なんだらう、この人。

どこか、フェンと似ている気がする。

「怒つてばかりいては見えるものも見えなくなつてしまします……まずは落ち着いてみたらどうですか？」

「しかしつ」

「では、サビイ様？この町の……いえ貴方の人生を助け出してくれた恩人を何時までも疑い続けるのですか？」

「それは……つ」

「それによく考えてみてください……。こんな成人もしていなような少年がこの町を蹂躪するような悪党に見えますか？」

「だが私は、この村を守るものとしてつ」

「その前に貴方は一人の人ですよ？サビイ様」

「くつ」

老人がそう言うとハーデさんは何も言つことが出来なくなり、重たい沈黙が俺達を包んだ。

ハーデさんが反論するのだが老人はただ否定するのではなくて相手を尊重する様な言い様で話し合いをしている。

俺だったら完全に一方通行な言い合いになつていただろう。

ハーデさんも少しバツの悪そうな顔をして、椅子に座りなおした。

「分かつたよ、グラシオ。シロウ達もすまなかつた……」

先ほどまでとは違つて落ち着いた声。

だが、その声質の中にもまだ疑いの音が聞こえる。

全信頼をしているのではないのだろう。

俺も老人が用意してくれた飲み物を飲んでみる。

「アツつ

「あ、熱い？

そんな馬鹿な。

こんな熱さ普通に飲めていたぞ？

……まで考える。

今の俺は天狼族の力を受け継いでいる。

フェンが確かこんなことを言つていたような……。

『人よりも天狼族に近い体になる』

ふむ、つまりこういうことか。

”猫舌になつた”

……しようもなつ！？

え！？

オオカミつて猫舌なの！？

まさか、こんなことにまで影響が出るとは……。

少し遠い目をしていると、

「熱かつたのですか？」

老人がこちらを心配そうな青い瞳で見つめてくる。

「いえ、大丈夫れす。猫舌らのを忘れてまひた」

「だ、大丈夫？」

アルセも心配してこちらを見つめてくる。

「舌だしてみて？」

「べー……」

「あや、真っ赤になっちゃつてるねえ……」

「まひか……」

これから真面目な話し合いが始まるとこだつたのにタイミングの

悪い……。

一人かつぜつが悪い何てかつこ悪いし、みつともない。
そんな未来に少し絶望していると、

「シロウ様。カップをこちらに渡して頂けますか？」

老人がそういうので、カップを差し出した手に渡した。

「これは失礼しました……。私としたことがお客人にお怪我をさせてしまうとは……。」

「待てグラシオ……」

「しかし……」

「無駄なことに使うな」

先ほどとは立場が逆転。

今度はハーデさんが強い口調で、老人を止めている。

老人が何かをしようとしているのをハーデさんが止めているようだ。

「……かしこまりました」

老人は小さくため息をつくと、こちらに向き直り、

「それでは氷を入れて来ますので少々お待ち下さい」

「い、いえいえこちらこそすみません……」

「御気になさらないで下さい。こちらの不手際です」

そういうと老人は優雅に奥へと姿を消した。

「すみません、あの方は？」

そういうえば名前をまだ聞いていなかつた。

何時までも老人、老人では失礼だ。

「ふつ、自分の正体は明かさないくせにこちらのことを聞くか……」

俺は息を呑んだ。

今それを言われると何も言えなくなる。

ハーデさんは嘲る様に笑う。

まあ、こんな風に言われるのは俺のせいだが流石に最初の態度と比べると完全に俺達は敵として認識されているのだろう。

「まあいい……そうだな、名前はグラシオ・メンテというらしい。

グラントはこの町の近くを飢えて倒れていたのを助けた。どうやら、

かなり遠くの国からやってきたようだな。何処から来たのかはわからん。だがやつについてどうこう言つつもりはない」

俺達と対応がちがう。

「それは……どうしてですか？」

「教えるわけがないだろう?」

ハーデさんはこちらを冷たい視線で射抜く。

「……どうぞ」

何時の間にか戻ってきたメンテさんが持ってきた飲み物はキンキンに冷えていて飲もうとはしなかった。

おひじに纏じ事（後書き）

ただいま13000アクセスを突破！

2200ユニークを突破！

お気に入りが30を突破しましたw

こんな小説を評価してくださっている方々本当にありがとうございます！

嬉しかったので今回は早めの更新とさせていただきます

この小説を書き始めて早2ヶ月……早いものですね

それではまだまだお人よしのオオカミさんは続きますので応援のほどよろしくお願いします^_^

例の「」と「」感想や誤字脱字などがあれば遠慮なく申し立ててください

オオカミは猫舌といつネタでしたが、そのことは仮面ライダー555の主人公を参考にしていますw

それでは

次の更新は……未定ですね（苦笑

番外編 お人よしの「老人（前書き）

え～と、アクセスが一万超えたってことで番外編をかくぞと言つて
ましたがやつと投稿できます

すこ～し長いですがよろしくおねがいします^ ^

番外編 お人よしの「老人

（日本）

司狼の両親が亡くなつてから7年が経っていた。
引き取つてくれたおばさんの方は数ヶ月前に亡くなり今は司狼と
おじいさんだけで生活していた。

仄かに香つてくる湿氣つた土の匂い。

土が空から降つてくる雲を受け、独特な匂いを届かせる。

土を踏めば土がぴちゃぴちゃと足に引っ付いてくるようだそれがど
こか可笑しくて、クセになつてしまいそうな感触だ。

耳を澄ませばサーと雨が優しげに降つており、屋根やバケツに当た
るとポンッ、パンッ小さな音楽会をしているようだつた。

体に当たりシャツを濡らし頬を雲が伝い落ちる。

そんな静寂を打ち碎くように騒々しい声が割つて入つた。

「おい、司狼！ちょっと手伝えつ」

ガツハツハと豪快に笑う男。

彼の名は春原豪氣。

お年寄りとは思えないほどしっかりと背筋を伸ばし、どすんどすん
と地面を踏み鳴らす。

髪は完全に白髪になつてあり、まだ中年といわれれば通るのではないかと思われる幼げな少年の面影をにこにこと貼り付け司狼に近づ
いていった。

その司狼と同じ漆黒の瞳の奥には一際淡く輝く優しい光が灯つてい
た。

司狼の両親亡き後、親戚中が渋つている中、率先して司狼を引き取
ふると言つた老人である。

そんな何故か張り切つてゐる豪氣に司狼は、嫌だとでもいつような
不機嫌な顔を隠しもせず、ぶーと文句を垂れた。

「なんで俺がそんな事？」

豪氣はそんな司狼の態度も気にせず、ガツハツハと笑うと、

「いいじゃねえか。いつものボラ……なんちゃらだつ！」

「ボランティアね……。なんでいつも忘れるのかな？」

やれやれと顔に手を当てかぶりを振る。

「なんでもいいわい、ホレ着いて来いつ」

「行かないって行つても無理やり連れて行くんでしょう？……ちよ、

やめて、行くからつ！服が伸びる」

文句を言つ司狼を無理やり引っ張つて、歩き始めた。

「傘は？」

「いらん、どうせ。向こうへ行けば汗だらけじゃ。そんな変わらん

「んじや、タオルとかぐらい持つていこうよ？ああもうつ！人の話を聞かないんだから」

大体いつつも着き合わせられる俺の身になつてよと心の中で思つ。

どうせ言つたつてつれて行かれることに変わりはないのだ。

小さくため息をつくと黙つて引っ張られる。

雨足が強くなり、司狼たちを進ませんと一人を強く強く打ちつけた。

「ああ、腕が痛い……」

司狼は肩を回したり、腕の筋肉を揉むなどして何とか痛みを和らげようとしていた。

豪氣が言うボランティアは本当にたいしたものではない。

例えば田植えをするから手伝ってくれないか、子どもの世話をしていて欲しい、害獣が出た駆除して欲しいなど時々町会から頼まれる事だつてある。

そんな時、豪氣は決まってこうこうのだ。

『任せとけ！』

相談されたら即承諾。

持ち前の豪快さと気前によさで村一番頼られていて、一番の人気者だ。

そんな豪氣は今までに手伝い 今回はただの模様替えだった を終

え頼まれていた人と世間話をしている。

会話は聞こえて来ないが話は弾んでいるようだ。

時々ガツハツハと豪快な笑い声が村中に響く。

雨で目が開けられないほど降っているところのによく通る声だ。

司狼はそんな豪氣を理解できないとでも言つような眼差しで見つめた。

何故こんなにつらに思いをしてまでボランティアをしているのだろうか。

何故、何の見返りもなしで助けることが出来るのだろうか。

何故……あの人があんなに気持ちよく笑うことが出来るのだろうか……。

(わからない……俺には……。)

司狼は突然、本当に唐突に家族を失った。

さよならも言えない。

ありがとうも言えない。

愛しているも言えない。

人間として持ち直しているが今の司狼には感情というものが多々不足していた。

だから、あそこまで自分の感情を表に出せる人がわからない。

どうして笑えるのかが分からぬ。

すると肩をバンバンと叩かれた。

司狼が顔を上げるとそこには巨木。

いや豪気がいた。

「どうした、何か考え方をしていたようじゃないか」

「いや、何もないよじいさん……あつたとしてもあんたには関係ないことだよ」

その一瞬、豪気がそこにことした顔が曇つたが下を向いていた司狼はそのことに気がつかない。

「そうか、ならいいんじゃがのつ」

「うん、ありがとう……」

雨が激しく司狼たちを打ち付ける。

目を開けようとしても常に目を叩かれているように痛みが襲い開けることができない。

そんな中司狼たちは自身の上着を傘がわりにしてとぼとぼと歩いていた。

司狼は何故感情を表に出せないのかを、豪氣は先ほどから浮かない顔をしている孫を心配して……。

二人の気持ちは互いに一方通行ですれ違いもしなかった。

「司狼」

「豪さん！大変じやつ」

「な、なんじや？」

出鼻を挫かれた豪氣は戸惑いながらも声をかけてきた老人に聞いかけた。

「実はのお・・・。以前からここいらで烟を荒らすとか悪さしていた鹿が、今度は暴れ始めてのうーつもひえらい騒ぎじや、どうとかできんかの？」

老人は息も絶え絶えに一気に捲くし立てた。

よっぽど急いでいたのだろう。

だが、その言葉を聴いて先に行動したのは豪氣では無かつた。司狼だ。

濡れるのはお構いなしに走る。

走る。

ただがむしゃらに走る。

司狼がただ一つ思つこと……。

じいさんが何故、あんなに笑うことが出来るのか……。

この出来事を自分が解決すれば少しほは分かるのだろうかと考えて。

司狼の背中に呼び止める声が、掛けられたが激しく打ち付ける雨で司狼まで届くことはなかった。

司狼が問題の場所まで行くと合羽に身を包んだ大人たちがああだこおだ言いあつていた。

話されているのはもちろん件の鹿のこと。

「あの……今はどうなつてるんですか?」

「危ないから下がつて……ああ、豪氣さんの所のボッチャンか

「ええ、そうです」

「そうか、ところで豪氣さんは?」

「遅れて来るそうです、流石に若さには勝てないんでしそうね」

司狼は愛想笑いを浮かべた。

だが大人はそれを信じたようにうむと頷くと現状を話し始めた。

「ええと、そうだね。君から豪氣さんに伝えてくれるかな?」

司狼はコクンと頷いた。

「それじゃえ」と今はねえ、あそこが見えるかい?」

そういうつて大人は目と鼻の先にある雑木林を指差した。

それにつられるように司狼も視線の後を追う。

見るとそこにはベキベキツベキベキツと木の皮をいとも簡単に剥いでいる想像以上の生き物がいた。

踏み込むたびに土が跳ね飛ぶほど屈強な脚。

丸太のように太い体。

幾重にも別れそれだけでも危険だと分かるような角。

見るからに普通に見る鹿とはどこにかちがつた。

「おそらく、こちら辺の主だらうなあ……それが何か知らんが下まで下りて来ちまつたんだなあ……」

「へえ……」

司狼にはそれがどれほど危険なものか分からなかつた。

田舎に住んでいるといつても司狼は狩りといった野生の動物に近づく機会はあまりなかつたのだ。

司狼は他の大人たちとはちがい何故こんなものに怖がっているのだろうと不思議だつた。

人は普通体験してみないとその物事の本当の恐怖を覚えることはで

きない。

例えば激しい地震を受けていない人は、自分なら大丈夫。自分なら助かることができると、妙な自信をもつてしまい。逆に震災などの被害を直に受けた方々はもうこんな思いはしたくない。

といった恐怖を覚えてしまう。

今の司狼はそういう状況である。

周りの人たちは自然の動物がどれほど怖いのかを知っている。だが司狼は知らない。

だからたいしたことはないんではないか。

自分なら出来ると思つてしまふ。

そう思うと後は簡単だつた。

司狼は鹿に向かつて足を動かす。

群れる人たちの雜踏を潛り抜け、一直線に向かう。

「バカツ、あぶねえぞ！？」

大人たちの制止を振り切つて司狼は駆け抜ける。

「大丈夫ですつて、俺がなんとかしますっ」

「無理だつボウズ！？戻れ！！」

鹿もこちらの騒動に気がついたのか警戒するように耳をピンと立て、つぶらとは言えない自信に満ちた瞳で司狼を真つ直ぐに見据える。そして司狼は鹿の真正面に立つた。

そう真正面に……。

「バカツ！真正面に立つな！！」

「え？」

野生の動物には真正面に立つてはいけない。
敵として見られてしまうからだ。

当然司狼は真正面。

すると……

「ブルルルルアアアツ！？」

興奮したように鹿は、司狼に向けて大地を激しく蹴り突進してきた。

「しまつ！？」

ふとましく立派な角が司狼の目前にまで迫る。

「……ツ！？」

司狼は硬く硬く目を閉じた。

それは司狼の体に突き刺さり、鮮血が辺りに飛び散り、雨によつて流れていった……。

かに見えた。

「……？」

だが実際に司狼に痛みは無い。

体のどこにも痛みはない。

変わりに田の前には壁。

いや、これは……。

(この壁、いや背中は……！?)

「じ、じい……そ、ん？」

司狼からは見えないが豪氣は一矢りと笑つたよつた気がした。

「いよう、随分ムチャしてるとじやねえか」

豪氣はギリギリと鹿の角を掴み、鍔迫り合いをしている。

足場が悪いのか豪氣はズルズルと押され始めている。

「ふむ、少し……キツイのぉ……」

「だ、大丈夫なのか！？」

「……ツ……」

「返事をしろよー？」

「うるさいのぉ……」

「グツ……」

豪氣から漂つてきた凄まじい気迫に司狼は思わずたじろいだ。

鹿の方も巨体をビクッと震わせた。

瞳はゆらゆらと水気を帯び、瞳の奥に怯えが伺えた。

「おどれ、退かんか……」

掴む腕に力を込める。

足を踏ん張り地面に根を張る。

1

「
逃げ

ブルウ

「わしが怖いなら……ちりをと退かんかああああああああアーッ！」

ブル！？

豪傑の叫びにビケツと体を振るわせると小鹿のような俊敏な動きで

とこたへ行つてしもつた

んな

人間離れないといつこみを入れたか、たか腰が抜け、上手く繋がらなかつた。

卷之三

「二のバカモノがつ！！！」

11?

メリイツと音を立てて豪氣の拳が司狼の頬に突き刺さる。

卷之二

言葉の口から赤い霧が滴り落ちる。

たがそんなことはお構いなしに、強い力で司狼の胸倉を掴む。

お互いにお互いの里を見る

(じこわんの皿に運んでいる色。これは……塗え?)

豪傑は驚いた。アーヴィング。

「バカめ」

そういうと豪氣はふわりと司狼を抱き寄せた。

「ああ怖かった……怖かったさ……お前を失うことなどがなにより

豪氣の声ながら震えていた。

「何が起じるのかわからなかつたんじや。また……また家族を失うのかと……」

(そうか……じいさんにしてみれば、孫も娘も義理の息子も居なくなつてたんだな……悲しいのは同じか……)

「なあじいさん……なんであんたは人助けをするんだ?」

豪氣は少し考えるようにして。

「そうじやのう……特に理由なんてないわい」「ははつ、そうか。だけどじいさん……」

「なんじや?」

「あんたは暖かいな……」

「そうか……?」

「ああ、暖かい。日向にいるみたいだ……」

「司狼……一つだけ言つておくぞ?」

「ん?」

「無理だけは……するんじゃない……」

「うん……」

「後な人助けをしたいなら優しい人間になれ」

「……一つじやねえか……」

「豪氣さんつボウズ、大丈夫か!?」

ことが終わつたのを見計らつてか遠くで見つめていた村人たちも集まつてきた。

「大丈夫じや。ぴんぴんしておるわい

「そうかそうか、そりやよかつた」

「ああ、飛びこんで行つた時は冷や汗もんじやつたわい」

「なんだんだ、俺らでさえ渋るんじやからのう」

「まあ何はともあれ……」

「……無事でよかつた……」

村人們は司狼に暖かい眼差しを向ける。

みんながみんな司狼の無事に安堵する。

「ああ、そうか……じいさんはこの人たちの笑顔を守りたいのか

……

そつ思うと自分の中で何かが当てはまるかの様な感触があった。

それはまるでジグソーパズルで最後のピースがはまつたかの様な……。

あれだけ激しく司狼たちを打ち付けた雨はすっかりと止み。

空は夢だったかのように青空をのぞかせていた。

番外編 お人よしの1J老人（後書き）

1J1Jまで読んでいただきありがとうございました！

今回は元の世界に居た頃の司狼君と豪氣さんの馴れ初めみたいな話を田舎して見ました

豪氣さん鹿と真正面から向かっていけるとか（汗

僕がここまで続けていられるのもいろいろな方が見て下さっている
お陰です

次回からは本編を更新させて行きたいと思います

それでは感想は誤字脱字など遠慮なく申し立てください

次の更新は？

未定ですね

疑わしい老人（前書き）

いやあ、長い間放置してしまって申し訳ありません（汗

リアルで「コース登録とかいろいろばたばたとしてしまって更新できませんでした

これからまた忙しくなるので一ヶ月に一回くらいのペースで更新していくと思います

よろしくお願いします

疑わしい『老人

つらかった……。

今はハーデさん達と別れ、用意して貰っていた宿屋の一室にアルセ
といた。

俺は今にも腰掛が崩れ落ちそうなイスをなるべく壊さないようにも
たれ掛けり、アルセはベッドに横になり少し疲れたからとちょっと
前に眠ってしまった。

そして小さなため息をついてさつきまでハーデさん達との会話を整
理していた。

あの空気は本当に息が詰まる。

ハーデさん達の顔を直視することも、自分が呼吸するのもはばから
れるようなそんな重たい空気。

あの話の中で俺達はお互いに隠し事をしていた。

俺達は自分達の種族と目的を。

……まあその目的もごたごたしていて俺でさえ知らないわけだが。
その目的を知っている『本人はすやすやと胸を上下させて安らかに
眠っていた。

本当に気持ちよさそうだな。

俺は魅かれるようにアルセに近づいていた。

血色のいいピンク色の肌。
もつちりとしている頬。

なんだろう。

無性に押してみたい。

んでも起こしちゃうかもなあ。
どうしよう……。

うん、いいや押しっちゃえ。

我慢できずにアルセの頬を指で突付いた。

ふにふに

お、なんか気持ちい。

餅をつついているかのよつに押すといちりを押し出すよつな弾力。

ふにふにふに

なんか中毒性が。

起こしてはいけない。

頭では分かつているのだが止められない。

ふにふにふにふにふに かぱつ

ん？

かぱ？

かわいい擬音と共に指が温かい何かに包まれた。

ぬめりといつ感触がしたが不思議と不快な気持ちにはならなかつた。

なぜならアルセが俺の指をくわえていたから。

ちょ！？

痛くない、痛くないけど！

いろいろまずい氣がするよ！！

俺の焦りを知つてか知らずかアルセは

「ひほう……」

眠そうに半目を開けて焦点の合つていらない目でいちりを覗いた。

「ア、アルセ？」

「……はひはつてるほ？」

「いや、何……その……な？」

とりあえず苦笑いを浮かべた。

なんか無性につづきたくなつたなんて言えない。

恥ずかしくて……。

するとアルセは指をくわえたままのそつと起き上がりまだ眠そうな顔でこっちを見るとさうぱっと音を立てアルセは静かに俺の指を離した。

俺の指とアルセの唾液が間に銀の橋を作りたらんと垂れる。

「何やつてたの？」

「いや、その何だ」

「……」

無言の圧力でこちらをじーと睨みつける。

元々少々キツイ顔つきのアルセに睨まれると少し怖い。

「……司狼？」

穴が開くんじゃないかって位見られる。

しかもかなり至近距離。

「ほつペをつつついでました」

白状した。

だつて怖いんだ。

まさに蛇に睨まれたカエルとはこのことだよ。

カエル君の気持ちがわかつたよ。

だがアルセはその答えを聞いてさらに不機嫌になってしまった。

「そう、私が寝てる間にそんなことをねえ

「いや、ちょ、アルセ怒ってる？」

「怒つてないよっ」

「いや、怒つてるでしょ」

「怒つてない！」

そう言つとぶいっとそつぽを向いてしまった。

「……なんで私が起きてる時にやつてくれないの……」

「え? 何?」

「なんでもないよっ司狼のバカっ！」

あれ、俺なんで罵られてるんだろう。ちょっと悲しくなってきたぞ。

ちょっと突付いてただけなのになあ。

今度から氣をつけよ。.

…さて少々氣まずい。
話題を変えよう。

「それにしてもグラシオさんについてどう思つ?」

「え？ああ、あのおじいさん？」

「うん、そう。話をしていた時から氣になつていたんだけど……」

「あ！ああ、あの人は魔族だよ？」

「魔族？」

「うんそう。外見的には人間と変わらないんだけど、ちがうのは魔力を持つていてるかいないかだよ？」

うん？

つまりはこういうことか？

魔力を持つていなければ人間として部類され、魔力を持つていれば魔族として部類される？

つまりはグラシオさんは魔力を持っていた？

考えたことをアルセにそのまま伝えてみると

「その通り。ただ上手く隠そとはしていたみたい。なんていうんだろう、間違えて出て来ちゃつたみたいな？ほら、あの時つ、司狼が舌を火傷した時に」

あああつたねえ。

今度からちゃんと冷ましてから飲もう。

「一瞬だけだけど、魔力の匂いが一気に広がったの。ハーデさんに止められて何をしようとしていたのかはわからないけど、とにかく警戒はしておいた方がいいかもね」

ふむ、確かにその通りだ。

ハーデさん達はグラシオさんの『何か』を隠していた。

それが何かは分からない。

グラシオさん。

この町には似つかわない服装。

絵画の一部を黒く塗りつぶしたようなポカソンとその空間だけ抜け出てしまつたような。

グラシオさんだけが浮いているような感覚。
だけど、不思議と怖さとかは感じなかつた。

あの人の人柄だからだらうか。

俺は何かグラシオさんに懐かしいものを感じていた。
アルセには警戒しろと言われたけど、今度話を聞いてみよう。
それにハーデさんとも何時までも喧嘩していくくはないし、何か解
決する方法はないかと俺はまた自分の世界へと入つていつた。
後アルセからここに来た理由とかも聞いていなかつたな。
早く教えて欲しいものだ。

疑わしい「老人（後書き）

初めましての方、始めまして^ ^
いつも読んでくださっている方々、ありがとうございます
今回は少々アルセとの絡みを入れて見ました
いやあもう、リア充爆発しろですよね
クリスマス近いですし、余計にです
それについて司狼君、苦労人ですね
いろいろ問題抱えています
自分やら他人やら（笑
さあそろそろいろいろフラグを回収しなきゃですね
司狼君の能力とかもまだ明かしてないですし……
少々頑張って更新していきたいと思います！
それでは感想もしくわ誤字脱字などがありましたら遠慮なく申し立ててください
次の更新は？

未定
ですね

拭えない憎しみ

「……」は何処だらう?

前も後ろも真っ暗。

一寸先さえ闇に包まれ、自分が今立っているのか座っているのか酷く曖昧な感覚が襲つた。

温度なんてものは無くただただ暑くもない寒くものない矛盾した感じに俺はぶるつと身震いさえ起こした。

何処だろうか?

考えをまとめようとするが頭に霧がかかつた様にはつきりしない。その時今いる所から少し離れた所に光が灯つた。

鬼火というのだろうか儚く淡い茜色の光。

俺はその光に魅き寄せられるかのように、足は勝手に動いていた。光に近づいていく。

どんどん。

どんどん。

どんどんと……。

光に近づくにつれて自分の体に温もりが戻つてくる。

ドクンッ!

自分の鼓動が早鐘のように激しく脈打つ。

この感じ。

このぬくもりは……。

知つている。

忘れるはずがない。

何年たつても覚えている。

強く撫でてくれた大きな手。

優しく包んでくれた優しい体。

天真爛漫に花が咲いたような顔。

父さん、母さん、初音……。

声に出そうと思つても、何かが詰まつたかのよつて感にならない。

光に近づく。

淡い光が俺の体を包んだ。

「どうした？」司狼

その声を聞いた途端、体の奥底からジワッと衝動が込み上げてきた。そこに居たのはダイニングで大きな机を何時も四人で囲み、今は俺以外の三人が席についていた。

泣きそだつた。

低く優しい声色。

俺達をいつも心配そうに見守ってくれていた。

父さん。

「何をしているの？」司狼

何時も穏やかな父さんに代わり俺達を叱つてくれた。
だけどそこには優しさが必ずあつた。

母さん。

「泣きそうな顔してるよ？お兄ちゃん」

何時も俺の右肩に擦り寄つて甘えてくる妹。

何度も離れろと言つても離れなかつた。

初音。

死んでしまつたはずの家族が目の前にいる。

皆立ちゆくしてゐる俺を心配そうに見つめている。

暖かな　大切な俺の家族。

そして突然奪われた大切な家族。

俺はそれを求めるように震える手を必死に伸ばした。

父さん、母さん、初音も俺に手を伸ばしてくる。

ああ、もうすぐで、もうすぐで触れられる。

触れ合いたい。

その光を。

温もりを……。

触れた。

家族の指に触れた。

だけど、おかしい。

暖かくない。

何故？

俺を包んでいた暖かな温もりは？

まるで死人のような……。

そう思うと指にヌメリと嫌な感触がした。

ブワッ！

全身の毛穴という毛穴から嫌な汗が噴出して来る。

嫌だ。

自分の頭が何に触っているのか瞬時に理解してしまつ。

見たくない。

見たくない。

見たくない。

だが俺の意思とは無関係にまるで何かに操られているかのように、

ギツ、ギギツと前を見てしまう。

そして、俺は見た。

繋いでいる指からは真っ赤な零が滴り落ち、闇に吸い込まれていく。
それが俺の腕を伝い、尋常ではない量の零が俺の腕を真っ赤に染め上げていく。

見てしまった。

ちくしょう、ちくしょうちくしょう！

俺が掴んでいたそれ（・・）は手から先が無かつた。

俺を見ていた暖かな瞳も、温もりも、笑顔も……。

全部全部最初から無かつたかのよつにきれいさっぱりなくなつていた。

代わりにあるのははさみまであったとは全く逆。

冷たささえ覚える虚無。

そして更に代わりにあるもの。

それは俺より少し奥にいた。

それはズチャ、ズチャ……と嫌な音を立てながら何かをしている。

そうだな。

あれが何をしているかわかる。

分かつてしまつ。

あれは……俺の家族を解体してるんだよつ！？

夢にまで見た。

何度も殺そうとも思つた。

だけど忘れられない。

じいさんにあつてから緩和されたが当時の記憶が鮮明に思い起つた

れる。

憎い。

ダメだ。

憎い。

ダメだ。

憎い。

憎い憎い憎い。

次第に俺の感情が一つに統率されていく。
絶対に思いたくない俺の封印したい感情。

憎しみ。

『殺せ』

何処からか声が聞こえてくる。

それがどこから聞こえてくるのか。

誰なのか、そんなことは今はどうだつていい。

『さすれば貴様に力をやろう』

俺はこの言葉が酷く正論な気がしてきた。

だけど本能ではやつを殺したい。

理性が俺に歯止めをかけていた。

めつがいひを回べ。

やめろ、それを乱雑に扱うな。

やつの手には何かぶら下がつてゐる。

やつはそれをまるで「いいせ」扱うかのように雑にその辺に放り投げた。

自分の体にまるで麻薬の様に快感が走る。それは一瞬で俺の体を走り回る。

まるで生き物の様に時には激しく。

俺の体を暴れまわる。

そして俺の体はその感覚に耐え切れなくなつたかのよう」、自然と意識を手放した。

「」

卷之三

「JRの車を聞くと酔く安心する。

「何をしていいかわからぬ。」

そつだ、その後の記意が酷く愛昧だ。

「司狼つ、大丈夫！？」

モハヤハク風た賞酔してわたく

アルセ

「あ、起きた！？」

「ハーフタク」

「赤シトニ?

「うん、それに……ホラ」

万リセはそこへいふと俺の歎は指を這わせる
うニアソクの調子悪つ二ハ二。

するとアルセの指が湿っていた。

これは？

何故濡れているんだ？

「司狼……泣いてる」

え？

そう言われ手を頬に添えてみる。

本当だ。

確かに濡れている。

俺の目からも確かに涙は流れていた。

するとコンコンと控えめにトビラがノックされた。

俺は急いで涙を拭うと了承の意を伝えると。

「失礼します」

落ち着いた物言い。

入ってきたのはグラシオさんだった。

「少々強い力を感じたのですが……発していたのは？」

俺達は体に力を込めた。

疑っている？

だが、

「そう警戒しないでください、こんな老体です。その必要もないで
しょう？」

本人はそういうがこの人はどこか油断ならない。

俺達はいつそう体に力を込めた。

「そうですか……残念です。ですが、これだけは言わせてください
何を言うつもりだ？」

グラシオさんはアルセではなく俺を見つめ、

「……大きな力に負けないで下さい……」

！？

フェンの力のことか！？

何故あなたが知っている？

問いただそうとしたがその前に、

「失礼します」

と、部屋を出て行ってしまった。

「「ふう」」

と俺とアルセは同時にため息をついた。

「グラシオさん……司狼を見てたよね？負けないでって、どうこうこと？」

アルセが不思議そうに顔を傾げる。

だが俺はその質問に対しても答へなかつた。

『さすれば貴様に力をやろう』

その言葉が俺の頭にずっとリフレインしていた。

拭えない憎しみ（後書き）

毎回見てくださる方々ありがとうございました

今回は早い段階で更新できました

休日は暇なので……

さて今回の話は

完璧超人つぽかつた司狼君ですが、精神的にはかなり不安定です
ゆらゆらと揺れています

それがこの後の物語にどの様な影響を及ぼすのか

グラシオさんは果たして何者なのか

楽しみにお待ち下さい

感想などお待ちしています

次回の更新は？

未定ですね（笑

自由な鍛冶屋（前書き）

お久しぶりです
まあ、いろいろ語りたいですが、なにぶん久しぶりです
まずは小説をどうぞ

自由な鍛冶屋

“自由な鍛冶屋”？

「そ、”自由な鍛冶屋”。それが今回この町まで足を運んだ理由」とてつもなく嫌な夢を見た気がする夜から、夜が明けた。

夢の時に感じた嫌な感じは体からもうすることはなく、健康そのもので体も有り余っている。

そして今は食堂まで降り朝食を取っていた。

そして、やつと……本当に、やつとここへ来た理由を聞かせてくれた。

この町へ来た理由は、単純に人探しらしかった。

なんでも”自由な鍛冶屋”という人にアルセは会いたがっているようだ。

「それは……なんで？何か偉い人なの？」

「ん~、偉い人って言えば……偉いのかな？」

何ともはつきりしない言い方である。

「自由な鍛冶屋は武器職人なのですよ」

すると後ろから声が掛かった。

「あ、朝食おいしく頂いてます」

「いえいえ、喜んでいただけたのなら何よりです……」

二コツとこちらに笑みを浮かべる。

落ち着いた物腰に、柔和な顔つき。

何より聞いている者の気分を安らげてくれる落ち着いた声。

……グラシオさんだ。

俺達が今最も注意していなければならない、油断ならない人。

まあ……悪い人ではなさそうなんだが、何より全てを見透かしてい るような態度には気を抜けない。

そんなグラシオさんは俺達の会話を聞いていたようで”自由な鍛冶屋”について詳しく話してくれた。

「自由な鍛冶屋というのは先ほど申した通り武器職人で」ぞいます。しかし、自由な鍛冶屋は他の武器職人とは次元が違うと言われています」

「と、いつと？」

「彼が作った剣はどんな硬い岩でもいとも容易く切り裂き、彼の作る鎧は何物も通すことのない鉄壁の要塞と化します。」

ほお。

そんなすごい人がいるのか……。

それでその人に会つてどうするんだ？

「アルセ、その人に会つてどうするんだ？」

「決まつてるじゃないつ。同狼の武器を作つて貰うんだよー。」

あ、そうか。

俺は今手ぶらなんだつた……。

それで困ることは無いのだが、武器を持たないといつのはいろいろ厄介らしく。

使う使わないにしても持つておいた方がいいと言う話だ。

何でも武器が無いと魔物討伐の時に信じて貰えなかつり、手ぶらだと思つた盗賊や魔物がずっと狙つてくるらしい。

怖い話だ。

魔物討伐だなんてまず日本では聞かないし、盗賊やらに命を狙われるなんて普通に生活していれば遭遇することもない。

そこで信用も持て、盗賊やらに命を狙われないよう武器を作らうといふ話だ。

それにフエンの爪の中もある。

フエンの爪からは何か出ているんだろうか……。

フエンの偉大さが漏れ出しているのだろうか……。

爪の近くに居るだけで安心できた。

だから早く自分で身に着けていたいといつのも実はある。

「んで最初の質問を繰り返すことになるかも知れないけど、なんで自由な鍛冶屋なの？ そのよく切れる……だと鋼鉄……だとか？ そ

んなモノは他の人でもできるんじゃないか?何でその人なんだ?」

「あ、ああ……それはあ……」

「ごによごにょと言葉を濁した?

なんだなんだ?

アルセが俺に向かつてちょいちょいと手招きした。
こっちへ来いつてことか?

俺はアルセとテーブルを挟んでいるので体を乗り出した。
まあ、グラシオさんには聞かれたくないようなので、むちゅん小声
で。

「自由な鍛冶屋はね、お父さんの知り合いなの。今、私達の正体を
隠している時点で助けを求められる鍛冶屋は自由な鍛冶屋だけ」

「なるほど」

「それに、私は司狼の扱いやすい武器を知らない。それを上手く形
にできるのはおれりへ自由な鍛冶屋だけ」

「ど、言つと?」

「自由な鍛冶屋は相手の思考を読み取つて、それを武器に形にでき
るやじこ」

「ふむ、それで俺の好きな形にしていいと?」

「まあそういうこと。……変な想像しないでね?」

「は?」

「だつて……男の子つてエッチなんだしょ?形にする時にエッチな
ことを考えてそれが武器にならうものなら……」

ジトーといつちをジト田で睨んでくる。

「しないしないつ。ちやんと真面目に考えるつー。」

「ならないけれど」

そう言つて、ストンとアルセは乗り出した体をイスに預けた。

俺も何時までも、テーブルに手をつけて身を乗り出すのは流石にマ
ナーが悪いので、直ぐに座つた。

だがまあ、最後のはいらないよつな気がするが理解した。

これで此処に来た理由はある程度理解した。

つまり

俺の想像通りの武器を作るために自由な鍛冶屋を探しに来た。
簡潔に述べるとそんな所か。

それにも……

「ハーテさんはどうしていますか？」

「サビイ様ですか？ サビイ様は町の巡回です」

「巡回？」

「はい。 サビイ様はこの町は自分が守ると誓えていらっしゃる方なのです」

「へえ……」

やつぱりしつかりしているんだな。

「ですから……」

「？」

「あの方をあまり責めないであげて下さ……。昨日の事は私が深くお詫び申し上げます。

あの方はただこの町を守りたい、それだけは何としても譲れないものなのです。どうか……」

俺はアルセと視線を合わせた。

アルセも困ったような顔をしていた。

まああまり気にしていらないのをここまで丁寧に謝つて貰つても困るわなあ。

「いいですよ、グラシオさん。俺らは氣にしていませんから……。
むしろ素性の分からないこっちの方が、泊めて貰つていてありがたいんですから」

「そ、そうですよ。それだけでも十分です」

俺もアルセもそちらが責められる理由はないという意味も込めて言った。

まあグラシオさんはやはり聰明な方の様で上手く伝わったようだ。

申し訳なさそうな顔をしているがどこか安心したような顔になつた。

「そうですか……ありがとうございます……。してアルセ様は自由

な鍛冶屋が何処に居るのかは『存知』ですか？
そう聞かれたアルセはたはと笑つて誤魔化した。

「分からぬのか？」

「いやあ、お父さんからこの町に居るってことは聞いていたんだけ
ど、何処か詳しいことまでは……」

「んじや、探しようがなくね？」

「あはは……『めん』

おいおい、いきなり行き詰つたぞ。

「自由な鍛冶屋の居場所なら知っていますぞ？」

「へ？」

「自由な鍛冶屋ならこの町の隅に居ます。他の家とは雰囲気が違う
ので直ぐにわかるでしょう」

グラシオさんは相変わらずの笑顔で一コツと笑つた。

自由な鍛冶屋（後書き）

お久しぶりです

何週間もほつたらかしにしていてすみませんでした。これ
どうも1~2月と1~2月は忙しきらしくかなりバタバタとすこしてい
ます

つい先日も「ースの面接でしたし、テスト習慣でパソコンもあまり
かまえませんでしたし（汗

やつとり」を更新できました^ ^

さてグラシオさん謎ですね

何でも知つていそつた雰囲気、何処かこの町になじまない気配

ん~謎の人物です

この人とハーデさんは今後、司狼たちにどう関わつてくるのでしょうか……

更新を楽しみにしていてください

あと”自由な鍛冶屋”的読み方ですが、そのまま読んで下さつても
いいのですが、”フリー”と読んで下さつてもかまいません

とこうか読んでください。o_o

厨二つぽいですがよろしくお願ひします。

それでは今月はもう1、2回程度更新するつもりです

それではノシ

いつも読んで下さっている方々、初対面の方々もあつがとうござります

これからもよろしくお願いします

見ひや いけなかつた（前書き）

「い」にはまあ簡単なことだけ……
それもって申し訳ありませんでしたっ！

見ちゃいけなかつた

俺たちは何度も何度も目の前の光景が信じられずについた。

何度も目をこすり、瞬きをしこれが夢でないことを嫌でも信じさせられた。

途中アルセに頭を叩いてもらい痛みで目が覚めるのではないかと思つたのだが、それも杞憂に終わつた。

いくら現実逃避してもこれは現実だ。

そう紛れも無い眞実。

俺たちは今、自分の目を疑つてゐる。

それは何故か。

目の前の光景を受け入れたくないからだ。

そう目の前から「そいやつそいやつ」

なんていう、祭りの時みたいな掛け声が聞こえてきても現実。

冬……この世界に季節があるのかわからないが、少し肌寒い風が吹いているにも関わらずふんどしで剣で素振りをしている人がいるのも現実。

ほとばしる汗がこちらに飛んでくるのも現実……。

このままじゃ埒があかないでのアルセが先陣をきつた。

「……グラシオさん……何してるの?」

はい、これが現実……。

まあ少し時間を遡つて状況を整理しようか。

あの話の中で俺は”自由な鍛冶屋”

がどんなことをしているのか。

どんなことができるのかを知つた。

常人では作れないような世界に誇る職人。

そんな人だから俺は屈強な筋肉。

厳しくも優しく弟子に教える師匠。

世界から一歩置かれる匠。

それが俺が話を聞いた中で思つた自由な鍛冶屋だ。

ほら、よくテレビで映るじゃないか。

そんなバラエティみたいな番組が。

だから俺は内心ドキドキしていた。

鍛冶屋に対して厳かつて言うか厳格といつか……。

そして俺たちは自由な鍛冶屋がいるという家まで歩いた。街中を歩いてみるとアルセが言つていたことがよくわかった。ちゃんと耳を澄ませば人がいるのだ。

ただ家の影に隠れてこちらの様子を伺つて出てこないが……。まあ要するに怖がられているのだろう。そりやそうだ。

自分と同じ種族だと思つていたよそ者がミノタウルスなんていうバケモノを倒しちまつたんだから。

そりや警戒もするわ。

俺はこの状況がなんとも歯がゆい氣がして頭をガシガシと搔き乱した。

「それにしても、司狼は自分の武器は決まったの？」

「ん？ ああ決まってるよ。」

「へえっ！ どんなものなの！？」

「そうだな……。やっぱり大剣かな。よく屈強な男がでかい剣振り回して敵をなぎたおしていくんじゃない？ そんな風ならいいなって思つて」

「へえ～。かつこいいんじやない？」

「そうか？」

「うんっ。いいと思つよ」

「ありがと」

俺はそう言つてアルセの頭をぐしゃぐしゃと撫でた。アルセの髪つて不思議なんだよな。

何故かいい匂いがするし、髪がまるで川みたいに指の間を擦り抜けしていく。

触っていて飽きないんだよなあ。

「ちょ司狼待つて、やめてやめて」

「いいじゃなかうりやうりや」

「やめつてつてば～。乱れちゃう！」

そうアルセで遊んでいるとシンッと鼻をつく匂いがした。

「うおつ！？」

その匂いが我慢できなくて思わず鼻をつまんだ。

「なんだこれ！？」

「へえ……司狼も分かつてきたんだね。遅めだけどちゃんとお父さんの力は受け継がれてきてるみたい」

俺はこの匂いを慣らしながら徐々に鼻から手を離した。

「何これ……」

「司狼が今嗅いだのは魔力の匂いだよ

「魔力の匂い？」

「そう、私達は魔力が持つそれぞの匂いがわかるようになつてるの。司狼は今、鼻がツーンとしてるでしょ？」

俺はコクンとうなづいた。

「その匂いを覚えておいてね。便利だから……それはね、魔力が強いものが持つ特有の匂いだから」

「なんで便利なん？」

「それは今の司狼が逃げやすいため。いい？今の司狼が一人でその匂いのする人が近くにいたら全力で逃げて？」

「俺、結構戦えるよ？ほら、ミノタウルスだって倒した？んだし……」

「あんなのと一緒にしちゃダメ。この匂いのする人は本当にバケモノって言われるレベルなんだから」

「うかが？」

実際問題、今の俺なら負ける気はしない。

足だつて速くなつたし力も強くなつた。
どこに負ける要素があるつていうんだ?
まあいいか。

その時はその時だ。

「わかつた。その時はアルセを呼ぶよ

「本当に?約束だよつ」

「おうひいぜ?指きりしてもこくへらこだ

あれ?

アルセの反応がない。

見てみると頭に?マークを浮かべている。

どこか可笑しいところがあつたか?

聞いてみると

「指きりつて何?」

とのことらしかつた。

そうか知らないんだなあ。

「いいか?指切りつていつのはなあ……小指出してみ?」

「んつ」

俺の言ひとおりに素直に小指を差し出す。

俺はその小指に俺の小指を絡めた。

「わつわつ」

小指を絡めたらアルセが赤面したが大丈夫だろつか。

まあいい。

続けよう。

「これはな?絶対約束を守りますつて言ひ証だ

俺がこれからいうことを続けてな?

というと絡めた小指を凝視している。

異文化の文化つて興味津々になるもんな。

「指切りげんまん嘘ついたら針千本の~ます」

そう言って指を離した。

「これで俺がアルセの約束を破ることはないつ

「うんわかった。信頼してるよ? 司狼……私を一人にしないでね……」

「うん?」

…

最後の方が聞こえなかつた。

「なんでもないなんでもない!」

「そうか? ちょっと顔色悪いぞ?」

「そんなことないよ。ほりつ、問題だよーこの匂にはまだしからする?」

「ど二つて……」「…

四方八方に顔を向ける。

すると一方だけ匂いが微かに強い方向があつた。

そこにはこの町では当たり前のボロ小屋が、他の家とは少し離れたところにポンと建つていた。

「あそこ?」

俺が指を指すと。

「正解つ

俺たちはその小屋へ向かつた……。

そして冒頭である。

見ちやいけなかつた（後書き）

え～まずは新年のあこせつをば

あけましておめでとうござります

今年も僕ともどもこの小説をよろしくお願ひします

いやあ早いものですねえ……

僕がこの小説を始めてもう『去年』になるわけですかあ……

ちゅうとしみじみしてしまいますね（汗

それにしても皆様は風邪とかひいたりしていませんか？

朝はまた冷え込んできましたからね

僕も毛布をもう一枚追加しました^ ^

体調管理には気をつけてくださいね

それではあとがきなのかよくわからなくなってしまいましたが……

次回の更新は……

なるべく早くします。○ー

ここがけんじゅー? (縦書き)

最初に書かれておられます . . .

グラシオさんがあつちやけました。おーん

いいかげんにして！？

逃げたい。

「どうしようもなく逃げたい……」

グラシオさんが「そいやつそいやつ」と剣を素振りするたびに足がほとばしっているが今はそんなことばじりでもいい。

アルセがあそるあそる声を掛けた。

「あの……グラシオ……さん？」

やっぱアルセも自信ないっぽい。

するとグラシオさんっぽい人はこちらに気がついたのか目線をこちらに向けた。

「遅いではないですか。待ちくたびれましたぞ！」

無駄にテンション高い。

「それでグラシオさん……何ですか？」

「いえ？ グラシオの兄です」

「あつそうですか。やっぱり……」

あ、そうか。

お兄さんなのか……。

どうりで……。

「まあグラシオ本人なんですね」

「嘘！？」

「嘘ではありません。先ほど貴方方といったグラシオ・メンテニモこの私です」

「え、でもさつきとはまったく雰囲気が……」

「老人のお茶目心です」

と舌をペロッと出してくるグラシオさん。

そつかあ……グラシオさんかあ……。

「やいやいやいやいやいや！」

「えー？ 可笑しいですよ。幾らなんでも無理がありますって！ 見

てぐださ「よ、アルセなんかあまりにショックで呆けてるんですよ！？」

「ポケー……」

「アルセ早く帰つてきてっ」

肩をつかんでガクガクとアルセを揺すつた。

その様子をのほほんとした感じで見つめるグラシオさん。

「アルセっアルセっ」

「はつ！」

よし起きたつ。

内心ガツツポーズする。

「おかしいよ司狼……。グラシオさんがふんどしで素振りしている夢を見てたんだ。そんなことあるはずないのにね……」

「アルセ……」

「私起きてるよね？起きてるんだよね？田の前にふんどし姿のグラシオさんが見えるんだけど現実なんだよね？」

「泣くな。泣くんじやない……。後そこのじーさんポーズ決めるのやめてくれ」

「ほつほつほ」

ああもう！

こつちの話をまったく聞いてない。

確かにこの人を俺たちは油断ならない人として見ていた。
それでも落ち着いた立ち振る舞いとかいろいろ尊敬するところとかもあつたんだ。

それなのに、それなのに。

こう簡単にイメージを崩されると結構ショックがでかい……。

ショックを少しでも紓らわせるために何か言おうとグラシオさんを見たとき、田を離したのは一瞬だったのに確かに大きな変化が起こつた。

「グラシ、オヤ……ん？」

「何ですかな？」

「……いつの間に服を？」

「ジジイマジックです」

そう言つてグラシオさんは怪しく微笑んだ。

（小休止）

「アルセ大丈夫か？」

「う、うんもう大丈夫」

アルセも回復し、俺たちはグラシオさんに向き直つた。
今はもう最初に会つたころと同じ燕尾服に身を包み、立ち振る舞い
も落ち着いた雰囲気になつてゐる。

「え、ごほんっ。それで、あなたが自由な鍛冶屋なんですか？」
するとグラシオさんは大して、隠そともせずあつさりと応えた。
「はい、確かに私が自由な鍛冶屋で間違ひありません」

！？

やつぱりこの人が……。

「ではさつきのはわざなんですか？」

一番気になるところである。

ちなみにこの時は武器を作つてもらつことをすつかり忘れていた。
アルセも気になつており、ツツコまなかつたようである。
つまり一人ともさつきのグラシオさんが印象に強すぎて、他を気に
している余裕がない。

ようするにバカ二人だ。

するとグラシオさんは今度は口を開くのが、苦行ともいつよつて
おそるおそる口を開いた。

「実は私は二重人格者であります……時たまあのよつて、勝手に
表に出てきてしまうのです……」

そうなのか……。

だからあんなに雰囲気が。

「嘘ですけどね」

「嘘かい！？」

ああもう！

ペースがまったくつかめない！
まったく自由すぎるのはどう。
ん？

自由？

「自由って性格のことですか？」

一瞬ニヤッとした。

そのニヤッが嫌過ぎる……。

「違いますよ？ そうですね、そろそろ本題に入りましょうか……。
フェンリルの子どもたち」
この人俺たちの正体をつ。

いいかげんにしてー?（後書き）

お久しぶりですっ

今日は早い更新をすることができました^ ^

まずはいろいろ話す前に感謝の言葉を・・・

いつも見てくださっている方々と、初めて見てくださった方々

本当にありがとうございます!

お陰様でこの小説も5ヶ月も続けていることができます

これからもどんどん更新していくつもりなので、引き続き見ていただければ幸いです^ ^

さて、話の内容ですが、グラシオさんについてですね

グラシオさんだけでなくツツ「ミミ」で他の一人も壊れた気がしますが
(汗)

簡潔に言つと、グラシオさんのあの格好はわざとです

自由な鍛冶屋の自由な部分には相手にベースを掘ませないとか、とにかく雲みたいな人だと思つてください

これからもグラシオさんが入るだけでこうこうやりとりが増えてくれ

ると思います（笑

）

次の更新ですが、明後日にはあることができるのです

少々物語りに重要なものが出てくるつもりです

それでは、また明後日に更新できればノシ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9675v/>

お人よしのオオカミさん

2012年1月10日20時04分発行